

ブルーティカ

その朝、いつものように午前の見回りに出ようとして、コテージの重い櫛の扉に手をかけたときだ。彼は扉の下のすきまから、白い紙が差し込まれているのを見つけたのだった。

きちんと四つに折りたたまれ、中の黒いインクの文字が透けて見えるほど薄い紙、拾い上げ、ていねいにひろげてみると、それは短い手紙だった。

こんにちは。ひさしぶりね。わたしよ。

あれから一年たったわ。あなたに会えなくなってから、一年。あのときは、すぐくつらかった。あなたを追いかけて行きたいと思ったくらいにね。

わたしが今いるところがわかるかしら。わたしはね、ルーダに来てるの。ここである女性と知り合って、彼女がわたしに教えてくれたの、こうしてあなたに手紙が書けるってことを。

あなたに会いたい。

でも彼女に言わせれば、わたしがあなたによくない感情をもってから、今は会わないほうがいいんですって。なぜかしら。けど、わたしがあなたを恨んでるっていうのはほんとうよ。どうして恨まないでいられるの？ わたしがどんなつらい気持ちでこの一年を過ごしてきたか、あなたに想像できればいいんだけど。

何を書けばいいのかわかりません。すぐに涙が出てくるの。この手紙、ほんとに届いて、あなたに読んでもらえるのかしら。

お願い、返事して。どんな方法でもいいから。あなたに会いたいの。とても混乱しています。また書きます。

あなたを愛するプルーティカ

いささか困惑した瞳をあげて、彼は首をひねった。この手紙の内容に、まったく心当たりがなかったのだ。ルーダという地名も聞いたことがなければ、差出人の女性の名にも覚えがない。

封筒にも入れられず、無造作に差し込まれているところを見ると、誰かのいたずらなのかもしれない。

いずれにせよ、これをここに持つてきた人間は、今朝はやく来たのに違いない。ゆうべ眠るまえに扉を閉めた際には、確かこのようなものはなかったはずだから。

彼は、このあたりで知っている顔を順番に思い浮かべた。が、その誰にしたって、こんないたずらなど考えつきもしないように思えた。犯人は、もしかしたら宛先を間違えたのかもしれない。

妙なこともあるものだと思いながら、彼はなんとはなしに、その紙をまたきちんとたたんだ。そして、上着のポケットにしまうと扉を開けて外へ出た。

初夏のさわやかな風に、うつすらと草の葉や花々の匂いが混じり、自然な甘さを感じられた。昨日、珍しく雨が降ったせいで、まだしっとりした土が足裏に吸い付くようだ。このところ、天気の良い日には、しばしばそうするように、彼は今日もまた西の城壁まで歩くつもりだった。最初はコテージ裏の菜園から見回り、つづく蓮池の横を通ってハーブガーデンと薔薇園では本格的な手入れをする予定なのだ。

庭師として彼に任されているのは西六区、ちょうど城壁の西門からすぐ内側の四角い土地である。雲ひとつない快晴、彼は水色に澄み渡った空を見上げ、日が高くなれば少し暑くなるだろうと思った。

昼前まで、広い薔薇園で害虫退治に悪戦苦闘したあと、作業服についた泥や小さな虫を払い落とし、道具入れとリュックを肩にかつぐと、彼は西の城壁へ向かうならかなだらかな丘を登り始めた。丘を登りきると雑木林が広がっている。そこを通り抜ける小道の終わりに、門番のコテージがあった。

彼は、すりへった丸太の階段を上ると、扉わきにしつらえてある銅製のベルを鳴らした。しわがれ声とともに、扉が開いた。

「あんたか。もうそろそろ来るころだと思ったよ」

この西の門番は痩せた小男、訊いてみたことはないが、五十代半ばは、とうに超えているだろう。抜け目のなさそうな、はしっこい小さな瞳を光らせている。

「頼んでおいたヤツ、持ってきてくれたかい？」

彼は心で笑った。見かけによらず、この男はこんなものが好物なのだ。彼がリュックを下ろし、そこから大きな紙袋を取り出すと、小男は飛びつくようにそれをひったくった。袋の口を開け、頭を埋めるように中を確かめながら、感極まったように叫んだ。

「これなんだよ、これ！俺が欲しかったのはこれなんだ！」

今度は、彼も思わず声に出して笑った。

「ほんとに好きなんです、甘いものが」

門番は眉を寄せて向き直り、断固とした口調で訂正を求めた。

「甘いものだって？これは子供の駄菓子なんかじゃないんだぞ。

芸術品と考えてもいいようなものなんだ。甘く、ほろ苦く、香り高い、かの有名なヴィンスイーズの、」

「チヨコレートボンボン」

彼はわざと気取った鼻声で言った。

「そう、チヨコレートボンボンだ」

門番はうつとりと繰り返す。

「店にあるだけじゃ買ってきて来てくれって言うから、そのとおりにしたんですよ。あの可愛い女の子たちはどう思ってたんだろうな。不思議そうに目を丸くして見てましたよ」

門番は笑った。不揃いに並んだ黄色い歯が丸見えになった。

「俺の名前を出して買えばよかったんだ。あの店の子たちはみんな知ってるさ、この俺が町一番のお得意様だってね。それでも連中は俺の顔なんて見たこともない、俺はここから離れて勝手に町へは行けないからさ。門番なんて退屈な仕事のおかげでね」

彼らは塩づけ卵とパンに赤ワインで簡単な昼食をとった。デザー
トに門番は、銀紙にくるまれたボンボンを取りだすと、有難そうに

みつつほど食べた。残りは袋ごと大きな空き缶にしまい、狭いキッチン戸棚の一番上に置いた。

昼下がり、おざなりに気の抜けたカード遊びをしたあとは、ほかにすることもない。そろそろ午後の見回りに出ようと彼が腰を浮かしかけたとき、いつになく真面目くさった表情をつくって門番が言った。

「どうだい、城壁に登って見ないか」

「登れるんですか？」

彼はちよつと驚いた。今までの城壁に人が登れるなどと、思ってもみなかったのだ。

「ああ。鍵さえありや誰でも登れる。あそこの階段は滑りやすい石で、雨や雪の日は足元に気をつけないと多少あぶないがね。あんた、この町の外がどんなだか、まだいっぺんも見たいことないんだろ？」

この町は、ぐるりを長い石造の城壁に取り巻かれている。その高さは人の背丈の数倍、東西南北にそれぞれ大きな黒鉄の門があるが、それらはいつも閉まっていて、見張りの門番がそばのコテージに住んでいる。彼らの仕事はもっぱら、この町に不法侵入してくる者がないか、見張ることだ。

治安上の理由で、よそからこの町に移り住むには厳しい条件があり、その数はごくわずかに限られている。出て行くのはかまわない。門番のコテージで略式の書類にサインをすれば、いつでも自由に立ち去ることができる。けれども、誰かが出て行ったという話を、ついで聞いたためしがない。なぜか、この町の住民は、ここでの暮らしに満足しきっていて、未知の冒険など好まないようだ。

住民たちが、たとえものの試しにしても出て行くとういう気になれないのは、外の情報が少ないせいもある。

よそから来た人間はみな、自分たちがかかっていた場所については語りたがらなかった。一様に沈黙し、または言葉を濁してしまう。

そこで、城壁の外から小心な住民たちのうえに舞い降りてくるのは、怪しげな空想の翼ばかり、あんまりその想像の力が過ぎるので、それは想像を越えた現実と化し、善良な人々をして寒気を感じさせる

ような忌まわしい物語を様々につむぎだしていくのだった。

ともあれ、温暖な気候に恵まれたこの町は豊かで暮らしやすく、何が真実であろうと、ここから出て行く理由などひとつだつてないように思えた。誰にとつても。

西のコージを出ると、何本か椎の木を透かしてすぐ左手に、石壁の灰色が見えている。小道をはずれてばらくふかふかした草を踏んで歩き、壁のすぐしたまで来ると、門番はだぶついたズボンのポケットから鍵束を取り出した。それをがちゃがちゃいわせながら、目立たぬよう石壁に小さくあいた入口を閉ざしている鉄柵に、その鍵の一本を合わせた。

「こんなところから壁の中に入れるんですね」

彼は感心したようにつぶやいた。

「そうさ。ここから階段をのぼって壁のてっぺんまで行けるんだ。」

あと五分後にはあそこの上立っているだろうよ。そら、開いた」
彼らは暗くてひんやりした壁穴の石段を登り、まもなく城壁の上、石造りの道に並んで立った。

初めて見る外の世界は、思いもよらぬ壮大な眺めだった。

このような景色が望めるとは、誰が想像しただろう！

彼は我知らず興奮して叫んだ。

「これは！　こんなふうになっていたんですか」

少し強くなつた風に正面から吹かれながら、門番がこちらを向いた。

「びつくりしただろ？　俺も最初に見たときは、こんな意外な眺めだとは思わなかつたからな。たまげたよ」

彼らの立っている城壁のすぐ下は、赤っぽい岩肌がむきだしの崖になっていた。その崖を下りきると、濃い緑の樹海が広がっている。緑が薄れた遙か彼方に小高い禿山があり、その中腹には灰色の、瓦礫の固まりかと見まがうような建造物の群れが、昆虫の巣みたいにべつたり低くはりついて見えた。禿山の向こうは赤くかすんでいる。そこから地平線までは、草一本も生えてはいない、赤茶けた砂漠なのだった。

「あそこは、廃墟なんでしょうかね。ほらあの禿山の……」

彼は目を細めると、灰色の建造物らしきものをなんとか見分けようとした。

「いや。今も人が住んでる。ときどき、細い煙があがってるよ」

「あんなところに人が、ですか」

門番は壁に寄りかかり、すぐ真下を指した。

「あその森にだって人がいる。たまに森から出て、崖をよじ登って来るやつらがいるんだ。もちろんこの中には入れない。たいていそんなやつらにや許可はおりないからさ。しょうがない。やつらはここには^へふさわしくない^いんだ。見るも無残な格好で哀れだがね」
彼は門番の指した一面の緑をじっと見つめていた。今は動くものの影ひとつない。門番は城壁のうえをゆつくりと南へ向かって歩きます。両手をズボンのポケットに突っ込み、鍵束をがちゃがちゃ鳴らしながら、小さく鼻唄を歌い始めた。

首都ナム・ティンツの臨海空港から国内線に乗って四時間、トー空港に着いたときには午後の二時半だった。

さすがにここまで来ると、原色の布を細かくはぎ合わせたようなワンピースを着た人々がたくさんいた。首都ではほとんど見かけないトートの民族衣装だ。皆、長い裾を脚ではねのけるようにして、せかせかと歩いている。私もまた早足で混雑したロビーを横切ると、空港に隣接したターミナル駅に向かった。

プラットフォームのなかほどにある売店で温かい缶コーヒーを買い、運よく空いていたベンチに座った。少しずつそれを飲みながら列車を待っている間に、あたりにはどんどん人が増えてくる。ベンチに座りきれない人々は、持っている旅行鞆を椅子がわりに腰掛けたり、コンクリートの地面にあぐらをかいたりしていた。

このあたりでは珍しくもないらしいが、長距離快速は十分も遅れて来たうえに、何を詫びるアナウンスもなかった。私は苛立ちに舌打ちしながら乗りこむと、押し合いへし合いの拳げ句、強引に窓際の席を確保した。

目を軽く閉じて五十分、単調な揺れに身をまかせ、終点で降りると各駅停車に乗換えた。それから二十五分後、私は国境の町、ルーダに着いた。

もう日が落ちかけていた。

閑散とした駅前には小さな標識を立てたバス停があり、タクシーが二台止まっていた。スーツケースを転がしてそちらへ歩いて行くうとすると、どこからやって来たのか、ぼろをまとった十歳ぐらいの少年が、小さな手をだして荷物を引っ張ろうとする。振り返ると似たような子供がまだ四、五人ついてきていた。

「自分で運べるからいいの」

片手を振って子供たちを追い払うと、私は早足でタクシーのそばまで歩いた。

客待ちしている二台の運転手は、車を降りて談笑している。ひとりには欠けて錆の浮いたホーローびきのコップで何か飲んでいた。もうひとりはまだずつと若く、少年と言ってもいいくらいに見えた。

私は彼らに近づき、どちらにもなく頼んだ。

「あの。サイワナ慰霊碑まで行ってもらえない？」

二人は話すのをやめ、私をじっと見て、それからまた互いに顔を見合せた。私は思った、言葉がうまく通じないのかしら。

トート族が私たちのナム国に統一されてから、まだ十五年ほどしかたっていない。基本的に彼らの言語は標準語とそれほど違いはないのだが、発音やアクセントの位置、冠詞の性変化などでずいぶん響きが違ってくる場合もある。

私は少しゆっくりと繰り返した。

「サイワナ慰霊碑まで行きたいの」

コップを持った男が眉を上げながら首をひねった。

「あの事故の？ 今からかい？」

「遠いの？」私は訊いた。

「けっこうね」少年が男を見あげて口をはさんだ。「僕行くよ。あなた、ガス欠なんだから？」

「いや、調子わるいんだ。どうも今朝から」

訛りのひどい早口で、あとはよく聞き取れなかった。私は少年を

見た。

「あなたにさせてもらったほうがよさそうね」

少年は私のスニーカーを後部トランクに押しこんだ。私は、彼らの青い車が、いずれもずいぶん型遅れの国産車であることに気づいた。ボディはこのあたりの赤土にこすられてザラザラ、粗いサンドペーパーでもかけたように光沢をなくしている。窓ガラスも透明なのは真ん中だけ、四隅は白っぽく曇っていた。乗り込んでみると、案の定おしりのしたのスプリングも妙な具合に飛び出し、シートは泥で汚れている。

今どき、こんなボロ車が存在してたなんてね。私は胸の中でつぶやくと、ジーンズの裾についた泥を手でさっと払った。

口笛を吹きながら、少年はスピードを上げて車を走らせた。しばらくすると、荒っぽく舗装された道路が途切れ、赤土がむきだしになったでこぼこの地面に変わった。ときどき、ロバや牛を連れた男たち、物売りのかごを抱えた女たちをよけながら、私たちは寂しい町はずれの原っぱに、ぽつんと立つ慰霊碑までたどりついた。

車を降りた私の真横に、かろうじて太陽が見えた。たなびく雲をオレンジに染めながら、建物も山もない地平に、半分ほど沈みかけていた。

「あそこだよ」と少年は前方に見える低い丘を指さして言った、

「あの真上に落ちたんだ。あんときは村じゅうみんなびっくりしたよ、まるで星が落ちこちてきたみたいだな音がしたんだ」

私はふんと鼻を鳴らすと、冷やかな声をだした。

「星が落ちた音ですって？ あなた、そんなの聞いたことあるの？」
少年と車を道路際で待たせておいて、私は歩きだした。慰霊碑のずっと手前には、ぽつんと老婆が座っている。粗末なポリバケツに入れて、もう萎れかけた白い花を売っていた。彼女の弱々しげな呼び声を無視したあと、私は慰霊碑のすぐ前まで来て立ち止まった。

暗がりに慰霊碑の蒼いかたちが浮かびあがって見えた。花や果物などが供えられ、それらが傷みかかって、甘いような酸っぱいような匂いを漂わせている。

私は何も持つてこなかった。手を合わせるでもなく、ひざまずくでもなく、ただその場所に立っていた。目を凝らして、慰霊碑に刻みつけられた名前を順番にたどっていった。五十七人の犠牲者のリスト、その半ば過ぎに彼の名があった。

ひよつとしたら、いまさらもう何とも思わないんじゃないか、何の感情も湧かないんじゃないか、そう思っていたのに、私はやっぱりその名前に、それがここにあることに、衝撃を覚えた。そして、じつとそれを見つめていた。時間を忘れてしまいうくらい、ながいこと。何か、まるで神の啓示を求める人のように、私はじつと、それを見つめていた。

だが、いつまでたつても神示なんぞ顕れなかった。夕闇に文字が読めなくなり、私は視線をゆるめた。それと同時に私の意識は見知らぬ異界に投げ出された。かつてないほど、完全にひとりぼっちで。なんだって私はこんなところに来たんだろう？ 馬鹿げている。こんなところに彼がいるはずなのに。彼はいない。どこにも、どこにもいない。誰もいない、何の気配、何の啓示も持たぬ、このがらんどうの石碑だけ。寄りかかるすべもない、この虚ろな蒼い石。それだけ。たった、それだけだ。そして、この私。ここに、ひとりぼっちで立つ私。完全に、ひとりぼっちで。

私は顔を上げたまま泣き出した。ずつと見えないどこかに押しやってきた涙が、あとからあとからあふれて流れた。悲しいというより、私は猛烈に腹を立てていた。もしそこにハンマーでもあったら、私はそれを振り回して慰霊碑に殴りかかっただろう。

なにもかも失われてしまった。今ここで、私が守らねばならぬどんな法や掟がある？

軽く砂を踏む音が聞こえ、一瞬のうちに私は理性を取り戻した。涙をぬぐい、そつと振り向くと、あの運転手の少年が、私の三メートルほど後ろで慰霊碑に向かって合掌していた。その姿がなぜかまた私を残忍な気持ちにさせた。吐き捨てるように、私は叫んだ。

「そんなことして何になるっていうのよ。ここには誰もいやしないじゃないの」

少年は驚いたように私を見つめた。その大きくみはった瞳に、少

し気まずい思いがして、私は車へと足早に歩き出した。

「行きましょ。駅前のレストラン・ムド・ホテルまで戻ってちょうだい」

彼は素直そうにうなずくと、再び私を乗せてエンジンをかけた。

町灯も信号もない道を、砂ぼこりをあげて車は走った。私は、暗くてもはや何も見えなくなった窓のそとに目をやり、再び苦い思い出を反芻していた。少年は低く口笛を吹いている。アスファルトの道路まで引き返したあたりで、彼はふつつりと口笛をやめた。前を向き、ハンドルを軽く握ったままで、ちよつとためらうように訊いた。

「あなた、あの飛行機事故で死んだ人の家族が何か？」

突然の質問に、私は少し間を置いた。家族ですって？

「いえ、べつに家族じゃないわ」

「じゃ友だちとか恋人だったんだね」

少年はつぶやいた。それがあまりに邪気がなく子供らしいやさしさのこもった声音だったので、思わずまた涙がこぼれそうになった。恋人？ 彼は私を愛していたのかしら？ 私は彼に愛されていたのかしら？

彼の面影が目に浮かび、私はこらえきれなくなって、声を立てずに泣いた。しばらくして深いためいきをつき、バックミラーをふと見上げると、そこに映った少年は何か難しげな顔つきをしていた。そんな顔をすれば、多少おとなびても見える。彼はまた静かに口をひらいた。

「あのときね、いっぱい人が来たんだよ。この小さい町のホテルがみんなパンクしちゃうくらい。大変だった。……あなたも来たんでしょ？」

私は鼻をすすりながら答えた。

「いいえ。ここに来たのはこれがはじめてよ」

「ふうん」

「あのとき、来れなかったの。でも、ずっとここへ来たいと思ってたの。どんなところだか、やっぱりこの目で見たくて。なんだか、もう一度会えるような気がして」

また涙声になっていく自分を、私はなんとか抑えた。少年は、もう何も言わなかった。しばらくすると町のささやかな明かりが戻ってきた。彼はこの町で一番ましなホテルのまえに車を止め、運転席から出ると、後部トランクを開け、スーツケースをおろしてくれた。ちよつど私が財布からお金を取り出そうとしていたときだ、何か言にくいことを言うみたいなのに、彼はそつとつぶやいた。

「会いたくない？ その、亡くなった人に？」

私は彼を見つめ、かすかに微笑んだ。

「会いたいわよ、とても」

ためいき混じりに答えると、彼の手のひらに代金をのせた。

「もしよかつたらさ、僕のおばあちゃんに会って頼むといいよ」

私は彼の瞳を見つめた。

「おばあちゃんだつたら、会わせてくれると思う。ちよつと前にもやったんだ。まだちつちやい女の子を亡くしたおばさんが来てさ。

その人、すごく感謝して帰ったよ。この村に何人か出来る人はいるけど、おばあちゃんが一番信用されてるんだ。ほんとにたまにしかやらない、だから、あなたが行ってもやってくれるかどうか、わからないけどね」

私はあつげにとられ、まだ幼さの残る彼の顔に、険しい声をぶつめた。

「いったい何の話なの？」

彼は、二、三度まばたきすると、肩をすくめた。

「いや、いいんだけどね。余計なこと言っちゃったかな。あなた、なんだかあんまりかわいそうに見えたんだ。だから」

言つなり身をひるがえし、彼は車に乗り込んだ。私は、去つていくそのおんぼろ車を見送りながら、だんだんに気分が悪くなつてきた。

なんなのよ！ 人の悲しみにつけ込んで、いかさま商売の夕ネにしようつてわけ？ なんて町なの！ 野蛮人！

翌日の朝、またしても扉のしたから白い紙が差し込まれているのを見て、彼は一瞬ぎくりとしてしまった。すっかり忘れていたことを思い出したのだ。もつとも、覚えていたからといって、彼には何をどうするつもりもなかったはずだが。

彼は、すばやくかかんでそれを拾い上げた。そして、なんとなくそわそわと落ち着かない気分で、折りたたんである紙をがさがさ広げ、きちんと行儀よく並んだ線の細い文字に目を落とした。

ゆうべはなんだか気がたかぶってよく眠れませんでした。夜、ひとりで部屋にいたとき、突然、窓に小石が当たったような音がした。もしかしたら、あなたからの合図かもしれないと思って、カーテンを開けてみたけれど、誰もいなかった。真つ暗闇のはるか向こうに、星がまたたいていただけ。とても悲しくなってしまうした。ねえ、ほんとにこの手紙、読んでくれるの？

ニユースであなたの消息を知って、シヨックで体調を崩しました。それから元にもどるまで、数カ月かかったわ。そんな事情もあって、仕事もやめました。今は、市内の図書館でアルバイトをしています。このまえ、あなたにすごくよく似た人が本を借りにきたの。すごくそっくりで、息が止まるほど驚いたわ。図書館の入口で見かけてから、気づかれないように本の整理するふりして、ずっとその人のこと見てたの。その人はクリステインの「夕暮れの庭」を借りていったわ。あんなにあなたにそっくりなのに、よりによって、あなたが一番きらいだと言ってたロマンス小説を借りていくなんでね。こんなの皮肉だと思っただわ。

どうしてわたしになんにも言わずにあの町を出ていったの？どんな理由があったの？探してたのよ、二カ月のあいだずっと。なんにもわからないまま。今もわからない。今も。わたしのせいなの？それともはじめからそうするつもりだったの？いったい、わたしのことは、あなたにとって何だったの？こんな別れ方、つらくてたまらない。

なにもわからない。悲しい。わたしは不幸です。

その日は午前中の仕事もそこそこに、彼は自転車に乗って町へ向かった。片道一時間半の道のりをもどかしく思いながら、彼は、自分がなぜこんなことをしなければならぬのかと考えていた。ついでだから、と彼は思った。どのみち、もうそろそろ、つりがね草の種を買いに行かねばならなかったのだ。あれは夏まきして冬までに苗を大きくしておかないと、来年の春、満足に花が咲かない。ああそういえば、ガラスの保存瓶もいくつか買ってこなくては。今まさに満開の薔薇でジャムをつくれば、みんなよろこんでもらってくれるだろうから。そう、確か白砂糖が足りなかったはずだ。いやいや、ひよっとしたらまだ戸棚の奥に一袋、手つかずのまま置いてあるかもしれないのだが……

町なかの道はよくわからないので、だいたいこのへんだらうと見当をつけると、彼は自転車を降りた。通りに面した古めかしい時計屋に入ると、一人店番をしていた売り子に訊ねた。

「ええと、図書館へはどっちに行けばいいのかな？」

短いおさげを編んだ丸顔の少女は、不躰にあくびをしながら訊き返した。

「図書館？ ミサーラ寺院の？ それとも中央図書館？」

彼は少し考えた。

「どっちが大きい？」

「そりゃ、ミサーラ寺院のにきまつてるわ」

「だろうね。で、どう行ったらいいんだい？」

彼女は人さし指をぴんと伸ばした。

「あっち。この通りを左に行つて、大きな風見鶏のある黄色いれんがの家を右にまがるの。そしたらすぐ、パン屋が見えてくるわ。その店のまえの道をずっとまっすぐ曲がらずに歩くと、自然に寺院の門まで行けるわよ」

「そう、ありがとう。ところで」と彼は店のなかを見回した。「この時計、全部すこしずつ時間がずれてるんだけど、どれがいったい正確な時間なのかな？」

狭い店内に並んでいる時計は、小さな真鍮の置き時計から壁に掛けてある木製の鳩時計まで、十分おきくらのてんでばらばらな時刻をさしていたのだった。少女は面白そうに笑った。

「どれも正確じゃないわ。ほら、これがここで唯一の正確な時計よ」
言いながら、彼女は自分の腕時計を指し示した。一時十七分だった。

ほぼ十分くらいでミサーラ寺院の正門に着いた。彼は、そこにある大きな敷地内見取り図を見上げた。図書館は、祈祷所のわきを通って東のはずれにあった。利用カードは持っていないが、この町の人間なら、すぐにつくってくれるはずだ。その際、何か身分証明書のようなものが必要なのかもしれない。だがそんなことはどうだっていい。べつに、本を借りたくて来たわけじゃないのだから。

自転車を所定の場所にとめて、彼は歩きだした。ゆつたりとした敷地内は、れんが敷きの小道を除いて、みな青々とした芝生が張つてある。ところどころに設けられた手入れの行き届いた花壇が、目を楽しませてくれた。寺院の建物にはすべて、ぴかぴか光る緑色の飾りタイルが貼つてある。祈祷所の前では小さな噴水が淡い虹をつくり、それを透かして向こうに見えるこんもりと大きな木のしたでは、黄色い僧服の青年たちが数人、輪になって座り、書物を片手に何事かを議論しているようだった。

しばらく歩くと広いロビーを持つ図書館が見えてきた。彼は金色の回転ドアを押して、中へ入っていった。

「あの、すみませんが、」
受付のカウンターに座っている五人のうち、一番はしの若い女性にそつと声をかけた。

「お訊ねしたいことがあるんです」
図書館員の腕章をつけ、長い黒髪をまっすぐたらした彼女は、小さなカードのようなものに何か書き込んでいたが、顔をあげると無愛想な声で言った。

「何でしょう？ 本をお探ならその図書目録コーナーでお調べください」

「いや、そういうことじゃなくて」彼は、ちよつとためらった。

「人を探してるんですが」

「は？」

アーモンド型をした黒い目が、じつと彼を見つめた。

「ここでアルバイトしてる女性に、ブルーティカさんという人はいませんか？」

「ブルーティカさん？ さあ、私の知ってる限り、いないと思いませんが」

「そうですか？ おかしいな、いると思うんですが」念のため言うてみた。

「いないと思いますよ。その方、姓はなんていうんですか？」

彼は少しうるたえた。

「いや、それはわからないんですけど」

受付嬢の眉間にかすかなしわが寄った。どことなく、訝るようなまなざしになる。

「ちよつと待つてください」

言い捨てて立ち上がり、カウンター奥の事務室に消えたかと思うと、彼女はまたすぐに戻ってきた。そして、今度は確信に満ちた顔つきで、彼にきっぱりと言いわたした。

「そういう名前の女性はいません。それに、アルバイトは雇ってないんですよ。ここにいるのはみんな院の職員です」

礼を言つて、もの問いたげな彼女の目から逃れ、彼は図書目録コーナーに向かった。

本のタイトルがアルファベット順に整理されているカードを、丹念にめくる。「夕暮れの庭」というタイトルをもつカードはなかった。著者のインデックスからも調べてみたが、やはり見つからなかった。

彼は寺院を出てまた自転車に乗ると、道を訊ねながら中央図書館まで行った。その図書館でも同じことを繰り返してみたが、ブルーティカ本人も、「夕暮れの庭」という本も、捜し出すことはできなかった。

ラ・ムド・ホテルのシングルルームは、思ったとおり狭くてみすばらしかった。白地に細かい花柄を散らした壁紙は黄ばんで剥がれかけていたし、褪せたブルーのカーテンを開けると、窓枠には砂ぼこりがいっぱいいたまっていた。

ベッド脇の安っぽいサイドテーブルのうえに、ガラスコップとお湯の入ったポットが用意されている。私はスーツケースをベッドのうえで開けると、中をかき回してインスタントコーヒーの旅行用パックを取り出した。コップを洗面所できれいに洗ってからコーヒーを入れ、お湯を注いだ。香ばしい湯気の中に、心なしか鉄錆のような匂いが少し混ざっていた。

コーヒーを飲んでしまうと、さしあたり何もすることがなくなつた。

目的は、もう果たしてしまった。

あつけなく、その瞬間は過ぎ去つた。

何かを求めてきたはずなのに、結局は徒労に終わってしまったような気がした。私はぼんやりと考える。これからどうしたらいいんだろう。観光？ まさか。この町で、そんな気分になれるわけないじゃない。

私はベッドに寝転がって、静まりかえつた部屋のなか、電灯がかすかにジーと鳴る音を聞いていた。瞼を閉じると、手足から力が抜けていく。私は、泣き疲れていたのだった。

どれぐらい眠つただろう。腕時計を見ると、八時を回っていた。むっくり起き上がって洗面所へ行き、ブラシで髪をとかした。冴えない顔をしている。目は腫れぼたないし、肌は青ざめて生気がない。

またベッドに座り込むと、食事に行こうかどうしようかと迷つた。食欲はない。けれどもこのまま食べないで眠ってしまうとも思えなかつた。きつとおなかがすいて、夜中に目がさめてしまうだろう。私はホテルの案内をぺらぺらめくつてみた。ロビー横のコーヒーショップのほかは、二階に郷土料理の店があるだけだった。選択の余地はなさそうだ。

そのレストランは「紫すみれ」といった。入口のガラス戸を入ると、赤いカーペットのうえに白いクロスのかかった丸テーブルがいくつも見渡せ、天井の中央にはのろのろと回るミラーボールが下がっていた。ゆっくりとした民謡ふうの調べが物憂げに流れている。

紫色の民族衣装を着た女性が、私を奥の窓際の席に座らせてくれた。はじめは二十歳すぎぐらいに見えたそのウエイトレスは、よく見ると厚化粧のおばさんだった。もうじき夏というのに冷え冷えとしたフロアに、お客は私ひとり。テーブルにつく前から、もはやげっそりとした気分になっってしまう。それでなくても、あまり食べる気がしないのに、こんなレストランの料理、恐ろしくまずいに決まっている。

頬杖をつきながらメニューをめくっていると、人の話し声が出て誰かがこちらへやって来る気配がした。振り向いて見ると、ウエイトレスに案内されてきたのは、ひよろりと背の高い初老の男性だ。黄色いポロシャツ姿で、尖ったワシ鼻には銀縁の眼鏡をのせている。私がひとり座っているところへ、妙ににこにこしながら寄ってきた。そして、きれいな標準語で、一緒に座っていいかと訊ねた。「どうぞ」

私が答えるとすぐ、彼は自分で椅子を引いて座った。

「いやあ、嬉しいね。ここで僕以外の客に出会ったの、初めてだな。しかも、あなたのような可愛らしいお嬢さん。わかるでしょう？」
こんなところでひとりきりで食事するのがどんなに味気ないか」

ポケットからハンカチを取り出すと、彼は眼鏡をはずしてごしごしふいた。ふきおわるとまた笑顔をこちらに向け、がらんとした周囲によく響く声で続けた。

「なにしろ二週間まえに来てから、夜はたいていここ。もう寂しくて。でもね、意外なんだが味はまあまあいけますよ。もっとも」と彼は急に声を落とした。「あまり衛生に気を使ってるふうじゃありませんがね」

私が眉をひそめたのを見て、彼は笑った。

「なに、そんな心配するほどのこっちゃんないですよ。今の若い人はこう言っちゃんんだが神経質すぎる。このご時世、この国のどこへ

行っただって、そんなにむちゃくちゃなもんを食べさせられることなんか、まあ滅多とないでしょ。けど、昔はお嬢さん、ナム・ティンツだつて、ひどいもんでした。いやあ、あの独立戦争の後ときたら若い人にも想像もできないでしょうが、僕らはそれこそなんだって食べたもんです。何しろひもじかつたんでねえ。うん、草むらで蛇をつかまえて食べたこともあつたんですよ。あれはしかし意外とうまいんだな。うん？ どれどれ。ああ、これはね、いけますよ」

一冊しかないメニューを私の手から取り上げ、風変わりな名のついた郷土料理の解説をしてくれる。聞いているうちに、私も彼とほとんど似たようなものを注文することになってしまった。

彼は私と同じく、首都ナム・ティンツから来ていた。織物工場をいくつか経営しているということだった。彼は言う、ルーダにはね、女性たちの細かい手作業で仕上げる美しい伝統織物があるんですよ、そりゃあ、独特な趣があつてね。

先祖代々伝わる手の込んだ技法は、機械ではどうしても真似の出来ないことらしく、その一風変わった絵柄の織物をタペストリーや敷物として欲しがる人が増えているというのだ。

「そんな有名な織物の産地だなんて、私、知りませんでした」
言うつと、彼は微笑んだ。

「そうでしょうね。実はごく最近なんですよ、よく知られるようになったのは。ほら、あの事故があつたでしょ。あれからです。あれで、この辺境の村に人の行き来がどっと増えたんですよ。しかし、あのときは大騒ぎだつたらしいですね、ここ一帯は」

何の前触れもなく、悲しい気持ち再び押し寄せてきた。

「いったい私はなんだつてこんなところにいるんだろう。どうしてこの寂しいテーブル、どうしてこの見知らぬ男でなきゃいけないんだろう。わからないじゃないの。」

「……どうしました、お嬢さん？」

工場主は心配げに箸を置くと、突然口をつぐんでしまった私の顔をのぞきこんだ。私はあわてて膝のナプキンで目をぬぐった。

「ああ、もしかして、あの事故でどなたかご家族の方が……」

「いえ、家族じゃありません。家族じゃないんですけど……」

私は気を取り直して深呼吸し、ナプキンをまた元ののように広げた。「あれは……不運な事故でした」

工場主はひとりごとみたいにつぶやいた。私は、ぼうつと黙ったままうなずいた。不運。不運ですって……

「じゃ……お嬢さんはお花をあげに来られたんですね？ おひとりです？」

「ええ、まあ」

私たちはしばらく何も言わずにお茶をすすっていた。料理はもう、ほとんど食べ終えていた。コンコン靴音をたててやって来たウエイトレスが手早く皿を下げ、お茶のおかわりを置いていった。彼女の姿が見えなくなると、工場主は小さな咳払いをした。しんみりと言った、つらいもんですよ、人が亡くなって、もう二度と会えなくなるってのは。

そのひとことで、私はあてのない放心状態から一気に醒めた。

頭に血がのぼり、思わず手にした湯飲みを握りしめると、やめてよ、と叫んだ。心のなかで。

なぐさめなんて、あんたのなぐさめなんて、なんになるっていうの。不愉快なだけなんだから。いらいらしてテーブルひっくり返したくなるだけなんだから。

私はただ、これ以上彼が何も言わないように祈りながら黙っていた。だが、彼には彼の物語があったのだ。

「昔、僕は妹を亡くしてましてね」

彼は手に持った湯飲みを見つめながら、話し始めた。

「あれは戦後、みんながまだどん底の生活してるときでしたよ。妹が六つで僕は九つでした。僕が罹ったジフテリアに妹も感染してね。食べるものさえない時代、薬だってもちろんないし、治療も今にくらべれば本当に荒っぽいもんでしたよ。僕はまだ体力があったから、時間はかかったがまた元気になれた。けど、妹は栄養も足りないから衰弱してね。……かわいそうに」

彼は一口お茶をすすった。そしてまた、じつと湯飲みの底を覗きこんだ。

「なんでだろうな、妹が死んだとき、僕のせいだと思いましたよ。」

ほんとにひどい時代でした。親父は戦死してましたし、おふくろと僕らきょうだいはそれこそ常時、食べるものに不自由してたんです。おふくろは食事のとき、自分のぶんと妹のぶんをけずって、僕の皿に一番多く食べ物を盛ってくれてました。僕が長男だったからです。それに、もう働いてたんですよ、学校にも行かずね。妹も弟も、誰も文句なんて言いませんでした。信じられないでしょうが、あの頃はそんなふうだったんですよ。誰かがひとりでも生き延びなきゃならなかったんです。でも、あとから思えば妹も弟も僕よりずっとひもじい思いしてたんですよね。それなのに僕ときたら、もつとよこせって殴ったこともあるんですよ。さすがにその時はおふくろにも叱られましたけどね。だけど、おふくろが見てない隙に、妹のぶんを横取りしたこともたびたびあったんです。ひどい兄貴ですよ。そんなこともあって、妹が死んでしまったのは、僕のせいだって気がしてね……」

私は何も言わなかった。彼は、湯飲みを筋張った手のなかでくるくる回した。しばらく黙っていたが、やがてまた口を開いた。

「僕はね、ずっとそのことが心の底にあっただんです。妹に優しくしてやったことなんか一度だってなかった、自分のつらさだけで、あの頃はなんにも気づかう余裕なんてなかったんです。妹が死んだとき、どう思ったかっていうと、もちろん多少はかわいそうでもあったんですが、正直、これで少しでも楽になるっていうか、そんな気持ちのほうが大きかった。それから、もうなりふりかまわない生活でしょ、妹のことなぞ、思い出すこともしませんでしたね。ただね、僕もこの年になって、工場のほうも順調で、ちょっとはゆとりも出てきて、そうしたらどういうわけか、たびたび思い出すようになったんです。あの頃のことをね。できることなら妹にあやまりたいと、もうそればかり考えるようになって。妹があので恨んでんじゃないかって、そんな気がしてね……」

彼はフウと大きなためいきをついた。

「もう僕もこの先長いわけじゃない。自分が死んだとき、あの世で妹が待ってるみたいない気がするんですよ。あのときと同じ、がりがりに痩せて、恨みがましい目で、息をぜいぜいいわせながら、お兄

「ちゃん、てね」

「なんだかぞつとして、私は反射的に口をひらいた。

「恨んでるなんて、そんなことないと思います。時代のせいですもの。しかたなかつたんですもの。どうにもできなかつたんですもの。彼はうつむいたまま、うつすら微笑んだ。

「そうでしょうかね」

「そうですね。きつと、天国で安らいでいらつしゃいますよ。そんなに幼くして亡くなられたんですもの」

「それを確かめられたらね。僕も安心して死ねますよ」

「どこか自嘲気味に笑みを浮かべていた彼が、ふと顔をあげ、まっすぐに私を見つめた。

「けど、お嬢さん。僕はどうやらね、明日にでもそれを確かめられそうなんですよ」

「……」

「知ってます？ ここいらにはね、きれいな織物以外にも、もっとすごい伝統があつたんですよ」

「……何でしょう？」

私は彼の目をまともにもぞきこんだ。そして、そのときになって彼の瞳が異様にきらきらと光っていることに気づいたのだった。

午前六時半。彼はやっぱり例の白い紙切れを手に、いくらか茫然とした気持ちで、扉の内側にたたずんでいた。おもてに出て、扉の張り紙を確かめる。元のままだ。

「プルーティカさん（または、その手紙を運んで来られる方）へ
私はあなたと面識がありません。いただいた連日のお手紙は、この住所または私の名前を、誰かのものとお間違えになられた結果と思われる。このコテージは城壁西六区三番で、私の名はジョシユア・ウォーです」

この張り紙の隣にピンでとめておいた二通の手紙も、誰かに触れられた形跡はまったくくない。このような注意書きにもかかわらず、今日も手紙は頑迷なまでに従来のやり方を守ってきちんと折りたたまれ、そのむきだしの白さを床のうえに横たえていたのだ。まるで、見えない空間からそつと湧き出たみたいに、音もたてず、それでいて彼が必ず手を伸ばして拾い上げ、折り目を開き、そのなかに目を通すだろうということ、あらかじめ当然のことと知っているかのように。

彼は手紙を持ったまま部屋の中に戻り、テーブルにそれを置くと顔を洗いに行った。キッチンでケトルを火にかけ、お湯を沸かしているあいだ、彼はまた手紙を手にし、しばしためらったあと、それを広げて読み始めた。

なにもすることがありません。こういう時間って、なんだか始めて持ったような気がします。あれ以来、あなたのことを忘れようとして、いつも何か新しいことをしたり、ほかのことを考えたり、どこかへ旅行したりしてたの。でも、そんな努力はほとんど役に立たなかったみたい。習いはじめたギターは今、部屋のすみでほこりかぶってるし、旅行したときのスナップ写真はアルバムにいっぱい貼ってあるけど、自分がどこで何を見たか、そのときどう感じたかなんて、全然覚えてないの。わたしが毎日思ってたのは、あなたのことだけ。来る日も来る日も心にあったのはあなたのことだけ。虚しくなってます。

あなたは、もうわたしのことなんて忘れてしまったのね。わたしがどんなに悲しんでも泣いても、どうだっていいのね。わたしは、わたしがあなたを愛するようには愛されなかった。そうなの？ こういうわたしの気持ちは、どうしたってあなたには伝わらない。そうなの？ わたしはあなたを愛していたわよ。誰にもくもらられないくらい、完璧に。こんなに完璧に人を愛せるなんて、わたし自身が思ってたくらいに。

あなたに会えたらどんなにいいでしょう。たとえ、その望みがかなわないものだとしても、少なくともわたしはあなたに愛されてい

たと、そう信じられたらどんなにいいでしょう。わたしがわたし自身をあなたに投げ出したように、少なくともあのととき、あなた自身もわたしに開かれていたのだと、信じられたらどんなにいいでしょう。

ねえレヴィ、あなた、どういっつもりだったの？ あの雨の夜、遅くに電話してきて、あのととき、何を言おうとしてたの？ 何とか答えて。

信じさせてくれなかったあなたを、わたしは恨んでいます。

では、また。プルーティカ

ケトルがかたかた鳴っていた。彼はそれを火からおろし、お茶の葉を入れたポットにお湯を注いだ。熱いミルクティーに堅焼きのビスケットをひたしながら、彼はまた手紙を読み返した。

なにかしら、見てはならないものを覗き見しているような気がした。プルーティカの手紙、その真剣に訴えかけるような哀切さは、それが誰かのいたずらなどではないことを彼に確信させつつある。彼は、彼女に同情すら感じはじめていた。この手紙は、ここで、この場所で、この自分に読まれるべきではない手紙、どこかの誰か、このレヴィという名の男の手にこそ渡るべき手紙なのだ。それなのに、もうこれで三日、三通がこうして無駄になっている。彼の手のなかで。このままでは彼女は、プルーティカは、こんな事情とも知らず、この男に無視されていると思うことになるんじゃないか。何の返事もないとすれば、きっとそう思うに違いない。どうすべきだろう。

彼は困ってしまった。苦心して書いた張り紙が目に入らなかったのだろうか。それとも、ここに手紙を届けに来る人間は、字が読めないのかもしれない。そういう人間もめずらしくはない。

その日、彼はハーブガーデンで午前中の仕事をすませると、門番のコテージを訪ねるつもりだったが、予定を変更した。自分のコテージに帰って昼食をとると、シャワーを浴びて服を着替え、窓の力

ーテンを全部おろしてベッドにもぐり込んだ。少し暑いのと、そんな時間に眠る習慣がなかったせいで、なかなか寝つかれなかった。午後二時くらいにいったん目が醒めてしまったが、彼はしばらくキツチンでビールを飲んだあと、やっぱりまたベッドに戻った。うとうとして目が醒める、そんなことを繰り返した。

寝返りをうちながら、彼は見知らぬブルーティカを想像した。たぶん髪は黒だろうな、ふさふさと波うつて肩のしたぐらいまであるだろう。肌は白く、瞳はやはり黒、引力のある深い黒だ。とくべつ美人だということではなくて、どちらかといえば個性的な顔立ちなんじゃないかな。口の悪い友人のオットーならたぶん、「あんまり可愛げのない女だね」と評するタイプだ。違っているだろうか？

彼女が直接来ればいいと彼は思った。同じ、夜通し待つにしても、そのほうがいい。どんな女が確かめられる。だが、これつきりということはないだろうか？ この計画がまったくの骨折り損になってしまうという事は？

またごろりと頭の向きをかえながら、彼は考える。いや、手紙の調子からすると、十中八九、来るような感じがする。今夜から明日の早朝にかけてだ。しかし、なんだってこんなことやってるんだろう。暗がりのなかを女がひとり、手紙を届けにくるだなんて。幽霊話じゃあるまいし……

夕方になってようやく彼はベッドから起きだし、裏庭の物置から懐中電灯を探し出してきた。食事のときは、あとで眠くならないようにワインを控えた。

夜が更け、いつもなら眠りにつく時間になっても、彼は起きていた。そして、部屋の明かりを消した。外のポーチが見えるキツチンの窓辺に椅子を置き、カーテンを少しだけ開けて暗がりを見ていた。やっぱりなんだか馬鹿馬鹿しい気分にもなったが、その一方で彼は、この思いつきに満足もしていた。とにかく、と彼は軽く唇を噛んだ。とにかく、これでもう自分が、「何とかしなくちゃ」と焦る必要はなくなるのだ。そうであって欲しい。

「お告げ師ですって！ やれやれ！」

私は工場主と別れてエレベーターに乗り、七階のボタンを押した。青白い蛍光灯の明かりにひとりで照らされていると、なんだかキツネに騙されたような気がしてきた。

あの人、ちょっとおかしいんじゃないかしら。「冗談言ってるとも思えなかったし。」

薄暗い廊下を歩いて自分の部屋まで戻ると、中からしっかり鍵をかけた。シャワーでも浴びようとバスルームの蛇口をひねると、出てきたのは黄色っぽい、鉄錆の匂いのする熱湯だ。あやうくやけどしそうになって、誰にもなく毒づきながら水を混ぜて温度を調節する。どうやらファンが壊れているらしく、蒸気のこもる狭苦しいバスルームは、ゆっくりくつろげるどころではなかった。すぐに息がつまりそうになり、私は髪を洗うのもそこそこに飛び出すと、ロッカーにそなえつけてあったタオル地のバスローブをまとった。

ベッドに腰掛け、花柄の小さな布製バッグから、手のひらの真ん中にちょこんとのるくらの香水びんを取り出す。りんごのような形のガラスびんのふたを開け、中の香水を手首に少量なすりつける。花の香りがふわりと漂った。最初はフリージアやすずらのやさしい香り、だんだんにばらやアイリス、ジャスミンの甘いブーケの香りに変わる。これを、お花畑の香り……彼はいつもそう言っていた。

ちょっと子供っぽくない？

そうだね。でも、いいよそれ。まるで、天国のお花畑にいるみたいだ

思い出すと、また悲しくなってしまう。

ねえ、もう一年が過ぎたわよ、なんてパミーは言った。幼なじみの彼女にはひとかけらの悪気もないとわかっていたのに、腹が立つのを抑えられなかった。あなたに私の気持ちはなんか、わかるわけないでしょ、そう叫んでにらみつけたら、彼女、しばらくぼかんとし

ていたっけ。

わかるわけがないのよ。わかりっこない。

悲しみを手放すには、一年あればじゅうぶんだとでも言うの？
ううん、私は手放したりしない。手放せない。だって手放せば、もうなんにも残ってないじゃない？ 私には、なんにも。そうしたら、もう生きていたくもなくなるんだから。

こんなこと口に出せば、私も狂ってると思われたって仕方ない。
両親も、きょうだいも、友だちもいるのに。でも、どうしてこうもひとりぼっちだと思うのかしら？ 彼と出会うまえは、彼がいなくたってちゃんと楽しく生きてたのに……

なにもかもがめちゃくちゃ。こんなの間違ってる。絶対、間違ってる。これが私の運命だとも言うの？ こんなに彼のことを思いつづけて、でも、二度ともう会えないだなんて。めちゃくちゃよ。ひどい。

私は座ったまま、傍らの枕をひとつ、力一杯に殴りつけた。それから、泣くまいと歯をくいしばった。これ以上泣けば、明日の朝まで頭ががんがんする。なにもかも、ぜんぶ彼のせい。彼のせいなのに。

涙が目のふちに溜まった。うつむくと、それが頬を転がり落ち、ベッドスプレッドのうえでぼとりぼとり音をたてた。

彼、今頃は天国のお花畑にいるのかしら……

ねえ、そこは素敵なところ？ 悲しみも、怒りも忘れられるほど？ あなた、自分ひとりだけ、そんないい思いしてるっていうの？ 許せない。私の前に現れて、そこへ連れてってよ。お願いだから。

でも彼、きつと私のことなんてもう思い出しもしてないんだわ。はじめから愛されてなかったのかもね。もともと私のことなんて、そう真剣に受け止めてなかったのよ。それで、あの日を境に連絡がとれなくなつて、どこかへ消えちゃったってわけよ。理由なんか、なんにも言わずに。みじめよね。ねえ、どうしてなのよ？

私はまた枕を殴りつけ、今度は疲れるまでやめなかった。荒くなくなった息を深呼吸してなだめながら、あれ以来、何千回も思ってきた

ことを、やっぱりまた思った。

彼に会いたい。

でも、もう二度と会えない。あの事故で彼は……

……なによ、お告げ師ですって。

あの人、ほんとに信じてるのかしら。テレビかなにかで昔見たことあるわ。死んだ人を自分に乗り移らせて、その人そっくりにしゃべったりするんじゃないか？ あんなの、いんちきに決まってるじゃないの。でもまあ、あの人は妹さんのことであんなに悩んでるんだもの、わらにでもすがりたい気分なのよね。

私は短いためいきをつけて、ぼんやりと褪せたカーテンをながめた。どうしよう。明日。いい加減な返事するんじゃないか。どうして私が一緒に行かなきゃなんないのよ。でもあんなふうに熱心に頼むんだもの、断れなくて。あの人、きつと怖いんだわ。ひとりで行きたくないだなんて。仕事関係の人も連れていきたくないのよ。弱みを見せるみたいで。やっぱり変よ、あの人。どこか狂ってる。歯車が、かみ合っていないわ。

バスローブの前をかき寄せ、そのままごろりと横になった。ふいに、私は誰もいない部屋でひとり、くすくす笑った。あの人が変だとして、そのことを私がどう咎められる？ 私だって、じゅうぶん変かもしれないじゃない。

あの人は、死者を恐がっている。許しを乞うている。罪の意識にとらわれている。気の毒な人！ そして、その逆の私よ。どう違うっていうの？ 哀れさの深みにおいて、私たちは同類。ただ、ベクトルが逆さになってるだけよ。

私はまた唐突に笑いだした。今度はもう少し大きな声で。止めようとしたが止められなかった。もうどうだっていい、そう思ったとき、ようやく喉の震えが止み、私はまた静寂のなかに横たわっていた。天井をじっと眺めながら。

翌日、工場主と私は[△]紫すみれ[▽]で待ち合わせ、一緒に昼食をとった。昨夜と同じように彼が代金を払い、私は礼を言った。

昼間の光で見ると工場主はずいぶん老けて見えた。背丈はあるが

痩せていて、ゆったりした綿のシャツのなかで身体が泳いでいる。私は彼のあとから階段を降りながら、半袖から伸びているしなびた細い腕を見つめた。大丈夫、万が一、この人がとんでもない嘘つきで、私に対して良からぬことを企んでいたとしても、いざとなれば蹴飛ばして逃げられそうだわ。私はまだ若く、体力もある。

外はいいお天気、いくらか暑いほどで、通りの印象もゆうべのひっそりうら寂しい雰囲気とはまったく違っている。

人々は日差しの中を、木陰から木陰へと移動して歩いていた。四つ角では物売りかごをしょった女や男が道路ぎわの地面にごさを敷いて座り、こまごまとした生活用品を売っている。粗末なプラスチックの歯ブラシ、白い綿の靴下、木で作ったおもちゃの人形、網に入った茶色いゆでたまごもある。そのござの列の前を車が通るたび、砂ぼこりがもうもうと舞い上がったが、彼らはそんなことにひるむ気配も見せない、真っ黒に日焼けした腕にめいめいの売り物をつかんで、道行く人々に振りかざしては声をかけている。歌うみたいに抑揚がある独特の方言のせいか、一生懸命なのに、どこかのんびりしているようにも感じられる。

私たちは砂まみれのタクシーに乗り込んだ。工場主は、シートに腰を下ろし、行き先を告げてしまうと、それからはひっきりなしに喋った。

「お告げ師はね、もともと占いから始まったんですよ。ずっと昔、まだここがトート教で統治されていたころ、国の行事やなんかのとき、特殊な星占いを使って日にちやその他を決めてたんですね。それは代々その家柄の者が受け継ぐ秘術だったんです。もう今では信仰も形骸化して、そういうきちんとした占いを出来る人も非常に少なくなっちゃいましたかね。でも、何人かは出来るんです。ほとんどがお年寄り。彼らがまだ辛うじて秘術の体系を知ってるんですよ。彼らのところには今も人々が問題を解決しにやってくるんですよ。まあ、村のよろず相談所みたいなもんですよ。たいていは生まれた赤ん坊の運勢を占うのだ、結婚相手の相性を見るのだ、家を建てるときに方角を見るのだ、そういうもんです。でも、昔はもつとすごい事が出来るお告げ師もいたんですね。彼らはもつぱら人が亡くな

ると、その家に呼ばれるんです。で、お経をとなえたりするんですが、彼らの本当の役目は、自分も肉体から抜け出て、その死者を霊界まで迷わないようきちんと送り届けることだったんです。これができるのは、昔でもほんの一握りのお告げ師に限られてました。今は恐らくもういませんよ。たったひとりを除いてね。まあ、そのお告げ師以外にもできると言う人もいますよ、でも調べてみるとどうもね。こういうことは、ごまかしが入り込みやすいもんでしょ？

けど、今から会うそのお告げ師は本物ですよ」

「どうして本物ってわかるんですか？」

私は彼をさえぎった。もちろん気分を害さない程度に。

「勘です」

「以前も何度かあのたぐいの人間と会ったことがありますね。自称占い師だの、霊媒だの。もちろん山師もあったし、こいつは本物かな、というのもあった。本物の場合、言うことに整合性があるって、こつちも納得できますよ。結局、あの時は妹の霊を下ろすところまではいかなかつたけれど、妹の好きだった布人形の話やら、僕の家族しか知らないようなちよつとした会話やら、その霊媒は見事に再現して話したんです。いやあ、もうびっくりしました。それまでどつちかっつていうと、そんなの信じてなかつたんですよ。でも、ああまで当たつてるとね。何かあるんだって気がしてきましたね。それからです、こういうのに関心持つようになったのは」

車は、いつの間にか町はずれのでこぼこ道を通っていた。窓のはるか向こうのほうには小高い丘と光に波うつ草原が広がっていて、羊の群れがぼつぼつと小さく見える。黒い牛を連れた男が前から来たのをよけて、車が大きく揺れた。私はドアの取っ手に内側からしつかりとつかまりながら訊いた。

「これから会うそのお告げ師さんのことは、どこでお知りになったんですか？」

「いやなに、織物の関係ですよ。こつちで例の織物を買付けちゃどうかと来たんですがね、なにぶん数も少ないし、今から注文して作るのも時間がかかるんですよ、安定供給できる代物じゃないんで

す。そういう伝統もすたれてきてますしね。技術を持つてる人自体が少ないんです。で、こっちのガイドとどうしようかと話してたんですが、結局やめることにしたんですよ。明日はナム・ティンツに戻るっていうその晩に、ここの同業者で今回はじめて知り合った人が食事に招いてくれましてね。その人から聞いたんですよ。なんでも、その人の姪っ子がまだ小さいのに病気で死んでしまって、母親はもう狂ったみたいになって。まえから有名だったそのお告げ師のとこへ駆け込んだそうですよ。そしたら、なんと、会わせてくれたって言うんですよ、その子に！」

「そのお告げ師に乗り移るんですか？ 死んだ子が？」
訊くと、彼はぐいと身を乗り出してぎらりと目を見開いた。私は本能的に少し身構えた。

「いやいや、そうじゃないですよ、お嬢さん。これがこのお告げ師のすごいところだね。その母親をあっちに連れてった、て言うんですよ！」

なにそれ。信じられない。

「じゃ、そのお母さんも死んでしまったんですか？」

彼はじれったそうに自分の腿を叩いた。

「いやそうじゃない、その母親をお告げ師があのお世へ連れてったんですよ。で、その女の子と会わせて、またこの世まで連れて帰ったって言うんです」

「なんだか、信じられませんね。まるで、魔法じゃないですか！」

「そうです。まさに、魔法です」

彼は、満足げにうなずいた。

「じゃ、今日は妹さんに会いに行かれるってわけですね？」

「いや。それは出来ないんだな」

悲しげに、彼は眉根を寄せた。

「死んでから時間がたちすぎてるんですよ、妹の場合はね。けど、会うことは出来なくても、妹があのお世でどうしてるか、それを知ることが出来るんだそうです。それさえわかったらね。御の字ですよ。僕はさっそく、知り合いを通してそのお告げ師に妹のことを教えて欲しいって頼みました。じゃ、三日くれって言われまして。調べる

のにどうしても三日はかかるって。で、滞在を今日まで延長したんですよ」

信じられない話だった。

この人、やっぱりおかしいのよ。騙されてるのがわからないんだわ。この一見、純朴そうに見える田舎の人に。

私は訊ねてみた。

「で、いくらかかるって言われました？ どれくらい請求されたんですか？」

首を振りながら、彼は微笑んだ。

「それが、はつきりしないんだな。べつに、いくらでもいい、て調子でね。どうも、そこんにはあんまりこだわってないみたいなんですよ。困ってる人は、助けてあげないと、という感じでね。このあたりの人は気がいいんだな」

馬鹿な人。後でべらぼうな額を聞かされてびっくりするんじゃないかしら。私は、彼に同情してしまった。どうせ騙されてるに違いないのに……

なだらかに連なる丘のふもとまで来ると、石造りの家がいくつかばらばらと建って、小さな集落をつくっていた。四角い小屋のように見える家々は、みなどれも似ていて、木のドア、小さな窓、平坦な屋根から突き出た短い煙突が同じ向きに並んでいる。正面のドアはたいてい開け放たれていて、その内側には見慣れぬ模様の織物がカーテンのように下がっていた。私たちを乗せた車は、その集落に入っていく、何度か曲がったあと、狭い路地のなかほどまで来て止まった。

うながされて私は車を降りた。工場主は、タクシー代の勘定を済ませると私を手招きして、少し奥まった場所にある一軒の家を指した。あそこですよ。

どこことって他とは変わらない家だが、見れば前の路地にはもう一台、タクシーが止まっている。お告げの順番待ちなのかしら。だとすれば、ずいぶん繁盛してるんだわ。

私たちはその家の前に立った。工場主がドアに掛かっているカー

テン様の織物に、ごめんくださいと声をかけた。それは見たこともない繊細な絵柄で、学生時代に美術史の教科書のなかで見た曼陀羅と呼ばれるものに似ていた。

しばらくするとその曼陀羅がゆらりと一方にかたより、隙間からひとりの少年が顔をのぞかせた。見覚えのあるその顔に、思わず私は小さな叫び声をあげた。

「あら。ここ、あなたの家だったの？」

少年は、ちよつと驚いた目をして笑った。

「なんだ。やつぱり会いに来たの？ おばあちゃんに？」

工場主は、私と少年を不思議そうに見ていた。私は肩をすくめた。「昨日、彼が運転するタクシーに乗ったんですよ」

少年を先頭に、私たちは曼陀羅をわけて家のなかに入った。薄暗く、なにやら香のような煙った匂いがかすかに漂っている。すぐ前の工場主は、さつきから緊張した面持ちで黙りこんでいる。狭い廊下で少年がふいとこちらを振り向くと、左横に消えた。そこに部屋があった。ドアはない。私たちが入口に立ったとき、その人もそこに立っていた。私たちはもう少しで鉢合わせして、ぶつかってしまったところだった。

「おいおい、もう少し落ち着いて話したらどうなんだ？」

門番は不機嫌そうな声音を隠そうともしない。無理もなかった。

東の空がうつすら白んではいるが、まだ夜明け前なのだ。彼は忍耐強く、もう一度はじめから繰り返さねばならなかった。

「だから、そもそものはじまりはこの手紙なんですよ！」

門番は、なみなみとコーヒーを入れたマグカップを彼に手渡すと、やおら人さし指を彼の鼻の真ん中あたりに突き出した。

「そうさ、そのいまましい手紙さ。それが何も無い空中から忽然と湧いて出たって、あんたは言うんだ。このまだ日も昇らない朝早くから息せききつてここへ駆けつけて！ 俺を夏の夜の夢から叩き起こして、ハッ！ 何事が起こったのかと思えば、他愛もない己の

夢に怯えてるんだ、五歳の子供みたいだね。ああ、けっこうなことさ、いい友だちを持ったもんだ」

彼は大きく息を吸い込み、カップをキッチンのテーブルに置くと、座ったまま腕を広げて叫んだ。

「いや、真面目に聞いてくださいよ、僕だってしつかり見たわけじゃない、実際、見たわけじゃないんですけど、そうとしか思えないじゃないですか！」

門番はコーヒーを一口すすると、カップを持ったまま彼の周りぐるりと歩いた。

「いいかね、じゃあ、話を整理しよう。あんたのところになにのわけのわからん手紙がたてつけに舞い込んできた」

「三日続けてきたんです」

「ああ、三日だ。三通。で、あんたは手紙を持ってきた奴を見つけてやろうと、徹夜で見張りをしたんだな？ というのも、その手紙つてのが、身に覚えのない内容のものだからだ。だからあんたは、誰かと間違われてると思ったんだ」

「そうですよ。でも、前の日に張り紙もしました。これは何かの間違いだって」

「そう、そうだった。でも、効果はなかった」

「ええ、まったく」

「で、あんたは見張りを決行した。訊くけど、ほんとに眠らなかったのかい？」

「ええ。眠ってませんよ。すごく眠たかったですけどね」

「ふん。で？ どうだった？ 確かに誰も来なかったにもかかわらず、その手紙がまた扉の内側に落ちてたって言うんだな？」

「そうなんです！ 驚きましたよ」

門番は目を細めると、あごを斜めにかしげて彼を見あげた。

「あんた、ほんとにずっと見てたのか？ 一睡もしないで？ いや、たとえ眠らなくつても、一度や二度、便所へ行くぐらいのことはしただろう？」

「ええ、そりゃまあ、行きましたよ。でも、その後は必ず扉のところまで行って確かめてるんです。ええと、僕が最初にトイレに行っ

たのは一時ごろでした。手洗いから戻るとき玄関まで確かめに行く
と、まだ手紙はなかった。で、おなががすいてきたんでサラミをか
じりながらビールを飲んでたんです。それからまたずっと見張って
いて、今度は三時半を回ったころトイレにたちました。その前に、
ふと思いついて扉のところを見ると、あつたんですよ！ びっくり
して、扉を開けてそのあたりを探したんですけど、人っ子ひとりい
やしない。信じられませんかよ、こんなこと。もう何がなんだかわか
らなくなつて、そのままここへ来ちゃつたんですよ。だって、

門番は片手を上げて彼を制した。それみたことかと言うように、
肩をすくめてみせた。

「わかつたよ。あんたがサラミを食つてるそのときにそれは来た
んだ。あんた、サラミとビールを取り出すときは、冷蔵庫をのぞき
こんでてポーチから目を離してただろ？」

彼は憤慨して叫んだ。

「でも、そんなのほんの一瞬ですよ！ ものの一分もかからない。
それで、何の足音もさせず、あの見晴らしのいいポーチから姿が見
えなくなるくらいまで遠くへ行けますか？ 無理ですよ」

門番は首を振った。

「いや、そのときあんたは冷蔵庫に気を取られてた。足音なんか、
聞こえないときだつてあるさ。それに、ポーチだつてまだ真つ暗だ。
見晴らしがいいとは言えないだろ。簡単だよ、さつさと歩けばあん
たがサラミとビールを手にして窓際に戻るまでのあいだに、そいつ
は姿を隠せる」

そう言われれば、そんな可能性がないでもない。しかし。

彼は釈然としない気持ちで、テーブルに置かれた手紙を手を取つ
た。

「だけど、もしそうだったとしても、いったいどういうわけでしょ
うね？ あのコテージはごちゃごちゃした町なかにあるわけじゃな
し、隣とはずつと離れてる。住所を間違えるなんてこと、なさそう
なんですけどね」

門番は二杯目のコーヒーを入れていた。後ろ姿のまま、そっけな
く言葉を返した。

「さあね。わからないな」

彼は、ひとつため息をつくと、かさこそ音をたてて手紙を広げた。門番が後ろに回って立ち、そのまま一緒に読み始めた。

やっぱりわたしのこと、忘れてしまったのね？ 何の返事もないうことは、そういうことなのね？ それとも、方法がわからないのかしら？ そういうこともあるって言われました。でも、普通はもう忘れてるっていう可能性が高いんですって。

どうしたらいいの。もう、わたしにはわからない。ねえ、わたしよ、ブルーティカ・サリオよ。あなたはレヴィでしょ？ わたしが愛したレヴィ・スコール。

そこはいつたいどんなところなのかしら？ 想像もできません。わたしが会いに行けるかしら？ でも、あなたの返事がないと、行けません。お願い、返事して。待ってるの。

ブルーティカ

追り返されるように門番のコテージを出ると、彼は自転車に乗った。もう興奮は醒めていた。帰りつくとすぐ、自分のベッドでしばらく眠ったが、また起きて服を着替えた。

四通の手紙がテーブルのうえに投げ出されている。

窓の外はおだやかに晴れて、水色の夏空には、一片の不思議も不可解さもないように思えた。彼の視線は、窓辺に置いたゼラニウムの鉢にとまっている。だが、彼の関心はその白い花にあるわけではなかった。

彼は四通目の手紙を再び広げた。手近なメモ用紙に、そのなかに出てくるふたつの名前を、綴りに気をつけながら正確に書き写した。それをポケットにしまうと、彼はコテージを出た。

その人は、私たちを見ると陽気に笑った。

「まあ、こんにちは。どうぞ、そのソファに掛けてくださいな」
私たちは、お世辞にも広いとは言えないその四角い部屋を見まわし、窓際に置かれた粗い布張りのソファに座った。それはとても小さくて、ふたりに腰掛けるには、少々きゅうくつに思えた。ふと足をを見ると、部屋の中央に敷かれた織物は、これまた奇妙な柄で、まるでどこか都会の町並みを極細色の鳥瞰図で描いた、という感じだ。じつと眺めていると、自分がこのソファごと宙に浮いているような気がしてくる。魔法のじゅうたんなら自分がそれに乗って飛ぶのだが、この敷物は、それ自体が町を乗せて飛んでいるのだった。

「何かお飲みになるでしょ？ セト、お客さまにお茶を」

言われて少年は奥のほうへと見えなくなつた。

大柄の、ころころと太つたその人は、見たところ六十代の初め、見事な銀髪を後ろで束ね、日焼けした褐色の肌にゆつたりと赤い服をまとつていた。表情にあわせてくるくる動く大きな瞳が、人なつこい印象を与えている。どこかしらお茶目な雰囲気をかもし出す彼女は、いかにも神秘的な魔力の持ち主というより、ごくごく普通の家庭婦人に見える。

この人が、有名なお告げ師？

私はいささか拍子抜けしてしまつた。少年が木の盆にのせてきた白い磁器のカップを受け取り、濃いミルク茶を一口飲む。飲んでしまつてから一瞬不安になつた。ひよつとして幻覚剤でも入つてたら？ まさかね。

目の前には初老の女性と、セトと呼ばれた少年が並んで椅子に座りながら何か冗談を言い合っている。急に、なんだかすべて馬鹿馬鹿しくなつてきた。ミルク茶は美味しく、ほんのりはちみつの甘味がした。

「何かわかりましたか？」

工場主が、単刀直入に訊ねる。

「妹さんのことですね？」

女性は、傍らの丸テーブルに手を伸ばし、古びた革表紙のノートを取り上げた。

「わかりましたよ。ずいぶん昔のことですね。時間もかかりま

したが」

「で、どうなんです、妹は？」

彼女は急に身を乗り出すと、じつと工場主を見つめ、ひとことひとことをはつきり区切って発音した。

「いいですか、私が今からあなたの妹さんについて確認します。まず、質問を聞いてから、それに答えてください」

「はあ、わかりました」

「彼女の名前はドウラ・シスリー。エイダ暦五百二年一月二十五日午後七時五十八分生まれですね？」

「はい。生まれ時間はそこまで正確にわかりませんが」

「血液型はA。髪は茶で巻き毛、肌は白、目は茶、左の耳にホクロがあります」

「ええ……だがホクロはどうだろう、もう覚えてませぬね」

「ええと、それならこれはどうですか。彼女が三つのとき、石炭ストーブで右腕にやけどをしましたね？ その痕が肘の内側に残っています」

工場主は感嘆の面持ちで彼女を見つめていた。

「そのとおりです。あれは三才ぐらいだったと思います」

「そして、彼女が四才の夏のことですが、あなたの悪ふざけのせいで池に落ち、もう少しで大変な事故になるところでしたね？」

私が見ているまえで、工場主はさつと顔色を変え、かすかに唇を震わせた。

「ええ。そうです。そのとおりです」

「彼女はエイダ暦五百八年二月九日午前五時十六分、ジフテリアで亡くなりました。埋葬されたとき、彼女は紺色のドレスを着ていました。白い襟がついて、胸元に黒いリボンを結んでいます。それは、彼女の叔母さんが作ってくれたもので、そのときの彼女にとって一番いいドレスでした」

「そうです。あれが一番のお気に入りでした。といっても、それ以外まともな服なんてなかったんです。あの頃は……」

「これは妹さんのことに間違いないですね？」

お告げ師に念を押され、工場主は魂を抜かれたように何度もうな

ずいた。

「そうです。間違いありません」

お告げ師は再び親しみのある笑顔に戻った。

「そう、良かった。間違いありませんね。これが妹さんでしたら、彼女はもうとつくに転生していますよ」

「転生？」

工場主は、大きく目を見開いて彼女を見つめた。

「ええ、生まれ変わりますよ。あなたの妹さんはエイダ暦五百九年一月十七日午後一時三十分を受胎した胚から、この世に転生しています。新しく生まれた彼女の魂がいつ、どこで生まれたか、またその性別もわかりません。私にわかるのは、ここまでです。彼女は、というより、新しく生まれたその命は、まだ亡くなってはいません。この地上のどこかで生きています。亡くなった記録はありません」

工場主は、まだ茫然と彼女を見つめていた。

「生まれ変わり……じゃ、妹は天国にいるんじゃないんですか？」

お告げ師は軽く肩をすくめて微笑んだ。

「天国、というのは誤解されやすい言葉でしてね。あなたのおっしゃるのが、もしやお花畑とか白いひげの神様とか翼のある天使なんかを指していらっしゃるのなら、そういうところにはいないと言えるでしょう。人の死後はそれぞれ違うんです。簡単にしかご説明できませんが、一般には、ある一定の期間、バルドと呼ばれるあまいな異次元空間を体験するんです。それから、生まれ変わってまたこの世に出て来るか、バルドに留まって、その人に属する想念の世界を造り上げるかします。この想念の世界が、天国やら地獄やら、いろんな名前がついているところだと私たちは考えています。ですが、そこを造り上げて、それが永遠の場所というわけじゃないですよ。いずれ、自分が何者で、どこへ行くべきか気づくときが来ます。ともかく、妹さんはバルドには留まらず、短い期間で転生されました」

工場主は訊いた。

「どうしてそれがわかったんです？」

彼女は首をかしげた。

「その過程を説明するのは非常に難しいですね。でも、私は見たんですよ。妹さんの過去を」

「どういうことですか？」

「バルドには記録が残るんです。長い長い磁気テープみたいなものがあると想像してください。それに私たちの過去がすべて、記録されているんですよ。それを現在からずっとさかのぼって、見て来ると、もちろんきちんと整理されてるわけじゃなくて、いろいろな出来事が複雑に絡み合っていますから、目的の時間や場所を見つけるのは大変なんです。たどりつくには集中してイメージしなければなりません。気力も体力も使うんです、この作業はね。バルドにまだ本人がいれば、呼びかけに応じますから簡単ですが、本人がいないと、つまり転生されると、ただ記録テープを延々と点検する、ということになるんですよ」

わかるようなわからないような、不思議な話が続いた。工場主はそれでも納得しているようだった。聞き終わると確かめるように言った。

「それじゃ、妹は今、どこかで生きてるんですね」

お告げ師はうなずいた。

「ええ。この世でね。私たちはそもそも死ぬということがありません。肉体は次々に変わったとしても、その中身は永遠の生をいきっているんです。普通は、気の遠くなるようなその永遠性から、自由に抜け出せるものではないんです」

「そうですか……よかったです。ほんとにどうも、ありがとうございますました。ありがとうございます」

工場主は何か感じ入った様子で、うつすら涙さえ浮かべながら、何度も何度も礼を言い、頭を下げていた。

帰りぎわ、彼は鞆から茶封筒を取り出し、お告げ師に手渡した。中は謝礼だろうなと思った。手を振る彼女を家の入口に残し、私たちはラ・ムド・ホテルまで、まだそこにいたセトのタクシーで戻ることにした。

セトは片手でハンドルを操りながら口笛を吹いている。昨日と同

じ曲だった。民謡ふうの、どこか哀愁を帯びた調べ。

工場主は私の耳に口を寄せてささやいた。

「いや、すごい。あの人は、本物の霊能力者ですよ」
私は訊いた。

「信じられるってことですか？」

「まず、間違いないでしょう。あのことを知っていたんですから」

「あのこと、とは？」

彼は私を見据えて言った。

「妹が池に落ちて溺れかかったことです。あれは、僕のせいだった。あのとき、妹が小さな木の橋のふちにかがんで魚かなにか見てたんですよ。僕はこっそり後ろからおどかしてやるうとつついたんです。そしたらバランスを崩して。びっくりして大人たちを呼んだんですがね、ささいないたずらでえらいことになったなと子供心にも怖くて、自分のせいだったこと黙ってたんですよ。妹はもちろん何もわかってなかつたんです。周りでわあわあ騒いでる大人たちに、僕は、誰か知らないおじさんが妹を突き飛ばして逃げたって、そう嘘をつきとおしたんですよ。いや、まいったな。あんなの、誰も知らないはずだ」

私は何と言っているのか、わからなかった。

「お嬢さん」

工場主は急にあらたまった声を出した。

「あの人を訪ねてみてよかつたですよ。あなたも、ついて来てくれてありがとう。僕はね、なんだか、妹のことをこれまでとは少し違う気持ちで考えられそうです。もう、なにもかも終わったんですよ。新しい誰かになってどこかで生きてるんだと思ったら、どんなにか僕も救われます」

「あの。ほんとに生まれ変わりを信じてらっしゃるんですか？」

彼は私を見た。少したって、視線を窓の向こうにやると、静かに言った。

「信じようと思いますね。何の確証もない、そんなことでも。そういう考え方があったっていいじゃないですか。少なくとも僕にとつては、妹がまたどこかで生きてると、そう言ってもらえたのは嬉し

かった。ほんとにね。あんなに早く、何の楽しみも知らずに死んでしまった妹だから。今はどこかで幸せに生きていてほしい、ほんとに心からそう思うんですよ」

最後の言葉が少し震えていた。彼は、眼鏡を取って目頭を押さえた。そして、そのあとはもうなんにも喋らず、窓の外に広がる昼下がりの草原を眺めていた。私はでも、いま彼は目に見える風景なんて、何も見てはいないんだろうと思った。

セトは口笛をやめていた。しんとした車内から、うっすらと砂ぼこりを透かして見る遙かな青空には、ちぎれちぎれに雲が光って西へ西へと流れていく。窓を少し開けると、風の中に満ちた夏のおおらかさが、頬をかすめて飛び込んで来た。

ホテルのロビーで工場主は、明日ここを発つのだと話した。私は駅まで見送りますと申し出た。彼は笑った、それにはおよびませんよ、朝の、とても早い時間だから。

これから夕食を御馳走したいけれども、知り合いに呼ばれているからと彼は言い、申し訳なさそうに茶封筒を差し出した。辞退したが、彼は、いやこれだけはどうしてもと、それを私の手に押しつけた。礼を言つて、それ以上その場にいたたまれず、私はエレベーターに向かった。部屋に戻って封筒を開けてみると、シルクのブラウスが一枚買える程の、けっこうな金額が入っていた。

市役所は五階建ての瀟洒なビルで、ミサーラ寺院とは、ほぼ背中合わせになる位置にあった。市役所の裏にも門があれば、寺院を通り抜けてすぐそこなのに、なぜかその方向には、ぐるりとれんが塀があるだけだ。

戸籍課の窓口には、先頭の彼をふくめて三人が列をつくっていた。応対しているのは、中年の女性。事務的な口調で、ときばきと用をこなしていた。真っ白に塗った顔に、濃いピンクの口紅だけが目立っている。彼女は銀色のボールペンを左右に振りながら、上目遣いに彼を見ると、神経質そうな高い声で説明した。

「いいですか、たとえいかなる理由があっても、そういうことはこちらで教えてさしあげるわけにはまいりません。これは法律で決まっていることです」

彼は再び食い下がった。

「いや、わかりますけど、僕も困るんですよ。住所が無理なら、せめてこの町にほんとうにこういう名前の人がいるかどうか、確かめたいんですが」

「ですから、ここでは名前と住所、理由を言うただけならば、ご自分の戸籍についてはお調べになれます。けれども他人のものについては一切、そういうことは認められてないんですよ。人権の問題がありますのでね」

「いや、しかしですね、」

また口をひらきかけた彼を、彼女は強引にさえぎった。

「とにかく、さきほどおっしゃられたような事情でお困りでしたら、苦情相談課のほうへ行っていただけですか。ここで何度おっしゃられても、こちらでは対処できませんよ」

彼は仕方なく引き下がった。が、このあとどうすべきか、とつさに判断できず、なんとなく窓口のすぐそばでぼんやり立っている。

彼の後ろに並んでいた男は、奇妙にねじれた黒い杖をついていた。男はくぐもった小声で訊ねる。アカシヤ記録を閲覧できますか。窓口の女性はつつけんどんに答える。ああ、それでしたらミサーラ寺院の事務棟で訊いてください。ここではもう管理してませんのでね。男は立ち去った。次の若い女性は言う。住民票が一枚いるんですが。このときには、もう彼は心を決め、すたすた歩きだしていた。ロビーの案内デスクまで戻ると訊いた、苦情相談課はどこですか？

苦情相談課の窓口に並び、彼はこれが果たして苦情と言えるのかどうか、考えていた。別に、なにか嫌がらせをされたわけでもない。郵便局を通していないので局の配達ミスでもない。つらつら考えているうちに、順番が来てしまった。ガラスの向こうに座っているのは、まだ若い男、細身の身体につるりと平面的な顔立ち。彼が簡単に省略しながら事情を説明すると、こう言った。

「はあはあ、なるほど。それは困りましたね。けれども、そういう」

たゞ相談でしたら、私どもとしましても、どうしようもないですね。もう警察には届けられましたか？」

彼はびつくりして訊き返した。

「警察？」

「そうです。最寄りの派出所でけっこうなんですが。行かれましたか？」

彼はまだ目を丸くしたままだ。

「いいえ」

男は気の良さそうな笑みをつくった。

「まあ、その手紙の内容によってはですね、そういうことも必要になつてくるかとは思いますが。いったいどういった内容のものなんでしょう？」

「それが……」

彼は言い澀んだ。係の男は、そのにこやかさを失わず、さらに訊ねる。

「たとえば、身に危険を感じさせるような脅しだとか、公序良俗に著しく反する品性下劣な言葉の羅列だとか。わかりますよね、言つてる意味？」

「いいえ、そんなんじゃないんです。ごく一般的な普通の私信です。彼はあわてて否定した、なぜ自分があわてなければならぬのかと思ひながら。」

「手紙をこちらに持ってこられたんではありませんか？ 見せていただけます？」

「いいえ、今ここには持って来てませんので……」

男は残念そうに眉を寄せた。

「そうですか。それではちよつとね。まあ、いずれにしましても、法的な根拠のない問題でしたら、こちらでは扱いかねますのでね。一度それを持つて最寄りの警察のほうまで行つてもらえますか？ それが一番いいと思いますよ。」

結局、何の解決にも到らないまま、彼は懨然とした面持ちで市役所の建物から出た。天気予報では、午後から次第に天気が崩れると

のことだった。案の定、彼が建物のなかにいるあいだに、昼過ぎから曇ってきた空から、すでに雨が降り始めていた。傘を広げながら彼は思った。やっぱりバスで来てよかった。これから一時間半、自転車で濡れて帰るなんて、想像しただけでも気が滅入ってしまう。

大通りを渡って横丁の商店町で少し買い物をすることにした。短いアーケードのあるその商店町にはちよつとめずらしい果物やチーズを置いている食料品店があったのだ。傘をたたんでそこへ向かう途中、しゃれた花屋が目についた。こんな花屋など、前からここにあっただろうか？ 彼の記憶では、この場所には薬局があったはずだ。だが、こんなことはよくある。このまえも古びた文房具店が新しい本屋に変わっているのを発見した。

花屋の店先にはバケツに入った色とりどりの花が所狭しと並んでいる。赤やピンクの薔薇、白いユリ、カーネーションやガーベラ、ポンポン咲きのダリア、足元には丈の低いヘリオトロープの束もあった。店のまえを通り過ぎるとき、湿った雨の匂いに混じって、それら花々の心地よい香りがほのかに感じられた。

その香りにつられるように、息を深く吸い込んだそのとたん、彼は強いめまいに襲われた。さっと目のまえが暗くなり、耳の奥がツンとして、何も聞こえなくなった。ひどく気分が悪い。彼は思わずその場にしゃがみこんでしまった。視界にはぼつかりと黒い部分が出てきている。まもなく、耳鳴りのキーンという音、そのなかにざわざわと人の話し声のようなものが聞こえてきた。その意味不明の話し声が、だんだんに大きく、高くなり、頭のなかは、まるで雑踏のど真ん中に置かれたマイクروفोनのようだ。彼は耐えきれず、両手できつく耳を押さえた。そのとき、誰かの冷たい指先が、彼の手に触れた。

「どうかなさつたんですか？」

エプロンをつけた花屋の店員だった。彼女は彼の隣で、同じようにしゃがんでいる。そしてもうひとり、すぐそばに誰かが立って、彼を見下ろしていた。その男に、彼は見覚えがあった。というより、男がついている杖に見覚えがあったのだ。

「ちよつとめまいがして。いや、もう大丈夫、ありがとう」

彼は立ち上がった。視界はもとに戻り、耳鳴りも消えていた。すべて、あつと言う間の出来事だった。

ポニーテイルの若い女の子が、心配げに顔をのぞきこむ。

「なんだか苦しそうにうずくまってらしたから。大丈夫ですか？」

「ああ、もうよくなりましたよ」

「そうですか。でも、まだ顔色悪いみたい」

行きかう人がみんなこちらを見ている。彼はいささか無理をして、女の子に笑って見せた。

「いや、ほんとに大丈夫、なんか一瞬クラっときちゃってね。でも、もうなんともないよ。ありがとう」

また彼が歩きだしたとき、どこへ行ったのか、路上には、もうあの杖をつく男の姿は見あたらなかった。けれども彼はそんなことには気がつかない。さっきのめまいの原因を考えている。こんなことなど今までなかったのに。なんでだろうな。夜中じゅう、起きてたせいだろうか。しかし、驚いた。一時はどうなることかと思つた。神経が疲れてるのかな。帰ったら今夜は早めに休もう。

食料品店でチーズを選んでいた彼は、何の脈絡もなく、突然に思い出す。さっき、そばに立っていた男と、以前どこかで会つたような気がする。あいさつもしなかったが、はて、どこで会つたんだろう？

彼はずっとそれを考えながら売り場をまわり、蜂蜜の小瓶を買おうと棚から手にとつたとき、突如、その答えがひらめいた。そうだ、市役所にいたんじゃないか。あの男は、戸籍課ですぐ後ろに並んだ奴だ。あの杖。なんだ、そういうことか。

彼は、手に持った蜂蜜の小瓶をまた棚に戻した。そしてそのすぐ横に並べてある大きいほうの瓶を取って、店のレジに向かった。蜂蜜の瓶には、黄色いラベルが貼つてある。そこには蜜蜂の絵と、黒い活字で[△]アカシア蜂蜜[▽]と書かれてあつた。

ずいぶん迷つたが、一晩じっくり考えたのだから、と私は受話器

を取った。今時分なら家には母しかいないだろう。ダイヤルを回すと発信音が聞こえ、すぐに母の声が耳に飛びこんできた。

「もしもし？」

「あ、お母さん？ 私よ」

「あら、あなた、今どこにいるの？」

私は少しためらった。

「ん、まだホテル」

母は驚いたようだった。

「なあに、こんな時間にまだホテルにいるですって？ 今日の昼過ぎの便に乗って帰るって言ったのに、もう間に合わないんじゃないの？」

「それがね、もう少しこっちにいることにしたのよ」

「どうしたの？ 何かあったの？」

返事に困った。

「ううん、べつに何もないんだけどね。来てみたら、のどかでのんびりしてて、けっこう景色のいいところなの。せっかくだし、もう少しゆっくりしていこうかって」

「そう。でも、お金持ってるの？ 大丈夫？」

「心配ないわよ、ちよつと多めに持って来てるから」

「それで、いつ帰ってくるつもり？」

「うーん、わからない。そうね、四、五日あつてとこかな。わかんない。また帰る前になったら電話するから。じゃあね」

「もしもし、ちよつと待って、それじゃはっきりしないじゃない。

いつ帰るの？」

私はわざと明るい声をつくった。

「だいじょうぶ、そんなに長居はしないわ。じゃね」

一方的に切ってしまった。

時計を見る。まだ十一時。でも、お昼は食べて行ったほうがいいわね。

△紫すみれにはもう行きたくない気分だった。外に出よう。どこか安くて美味しい店ないかしらね。なにしろ、今日頼んだって、いつまでかかるかわからない。ホテル代も馬鹿にならないし、そう贅

沢できないのよ。

ホテルの裏に回り込むと、今にも崩れ落ちてきそうな煉瓦造りのアパートがずらりと連なっていた。狭い路地を歩きながら見上げると、どの窓辺にも、細い紐からつりさがった洗濯物が、万国旗のようにはためいている。その下では、靴も膝小僧も泥だらけの子供たちが、母親に叱られながら追いかけてこをして遊んでいた。建物の入口階段には、老人たちが黙りこんだまま所在なさに座っている。私は、さもその界限をよく知っているというような顔をして、しばらくぶらぶらと散策した。へつばめ亭という看板の出ている三文食堂を見つけると、中に入ってみた。名前の意味もわからない具沢山の麺を頼んで昼食を安くすませると、また大通りまで引き返した。ちようと通りかかったタクシーを止めると運転手に、昨日は工場主が言っていたその住所を、今度は私が繰り返し返した。

いきなり訪ねて、もし留守だったら？ それはそのとき、待てるしかない。

私はなんとなく緊張しながら窓の外を眺めた。昨日と同じ風景が、同じように流れていく。都会のビル町ならば、プリズム光が尾を引いて飛び去るように目まぐるしく変わる車窓の景色も、ここではないつまでもものんびり、ただ風にそよぐ草の波と、乾いた白い土が広がっているばかり。そして遠くに見える羊たちと、ぱらぱら建つ石の家。

この世界はずっと昔からあり、ずっとこれからも続いていくのかしら。そんなことは不可能にも思えるし、けれどもそれがまた、当然のことにも思える。私には、この世のなにもかもが、ばらばらで不合理に見えた。そのくせ、一分の隙もなく整然と閉ざされているようにも見えた。

砂利道で車を降り、見覚えのある玄関の前に立つ。呼吸を整えてから呼ぶと、彼女がすぐに出てきた。あら、いらっしやい、と微笑むその顔には驚きも疑問もなく、どことなく予定調和的な表情ですらあった。また同じ部屋に通され、小さなソファに座る。今日はいかし、そこは妙にゆったりして、私はなんだか頼りない気持ち

になつてしまつた。彼女は、しばらく席をはずすと、お茶の用意をして戻つてきた。私は湯気の立つカップを受け取りながら、頭を下げた。

「すみません。ご都合も伺わずに来たりして。あの、こちらの電話番号がわからなかつたものですから」

彼女は笑つた。今日はしゃりつとした白麻の涼しげなハウズドレスを着ている。

「かまいませんよ。どうせ電話なんて、五軒向こうの区長さんの家に共用のがあるだけですからね。それに私たちはね、都会の人たちみたいに前もつて予定をたてたりしないんです。だって、ここにはそれこそ腐るほど時間があるんですもの。こんな小さな村でしよう、誰かに会いたければ、どこにいたつてすぐにわかりますよ」

「そうですか」

「で、あなたは何を訊きにいらしたの？」

「いたずらっぽい眼差しで見つめられ、私は思わず目を伏せた。」

「私、お願いがあつて来たんです」

「何でしょう？」

「実は、会いたい人がいるんです」

「亡くなつた人ですね？」

「ええ、そうです。あの飛行機事故で」

彼女はうなずいた。

「あの事故ね。その方は、あなたにとって、よほど大切な方だったようですね。聞きましたよ、セトから」

顔をあげると、私は彼女を見つめた。

「会えますか？ 私、聞いたんです、母親を死んだ女の子に会わせたいという話。私も連れてつて欲しいんです、そういうふうにお願ひします」

彼女は小首をかしげて微笑んだ。そして、言葉を選ぶように言つた。

「それは、無理ですよ。あなたの場合、何の知識も技術もありませんからね。あのお母さんは信仰も厚く、ご自分にも多少の経験がありました。私は言わば、彼女が自力で出来ない部分を少しお手伝い

しただけです。連れていったというわけじゃないんです」

「私じゃどうしても無理なんですか？ 今からなんとかありませんか？」

「無理ですね。第一、危険です。たいていのことは、技術で解決できるものなんです。でも、精神的な耐久度がたりなければ、何の技術も正確に駆使することはできません。正確なことができなければ、それにとまなう危険は、自分が覚悟しなきゃなりませんからね」

私はここぞとばかりに言った。

「どんな危険か知りませんが、私、覚悟ならできてます。怖くなんかありません。彼にさえ会えたらそれで……」

彼女はじつと私の目を見た。

「それで、何ですか？」

私は言った、「それで、どうなつても悔いはありません」

突然、彼女は声をあげて笑い出した。握った片手を口元に当て、こころごとおかしそうに笑いながら言った。

「それそれ、そういうのが危険だと言っんですよ。まあ、そんな顔しないで。あなたはずいぶん情熱的で、それはいいんですけど、こればかりはねえ。そういう熱心さが、かえって仇になることもあるんですよ」

「それじゃあ、どうすればいいんですか！」

私は半泣きになって叫んだ。考えに考え、勇気をふりしぼつてここまで来たというのに、いとも簡単に笑われてしまったのだ。

「私、どうしても彼に会わなきゃいけないんです。会いたいです。それも、私が直に会いたいです。あなたが行って見て来るだけなんて、そんなの嫌です。そんなの、そんなの……」

「信じられない」

ひょいと眉をあげ、彼女が面白そうに続けた。その表情に逆らうように、私は唇を尖らせた。

「そうです。自分の目で見ないと、やっぱり信じられませんかもの。

私は確かさが欲しいんです。そもそも、ほんとか嘘か、わからないようなものなんて、無意味じゃないですか」

「無意味、ねえ」

彼女は軽くためいきをついて、何か考え込むように黙ってしまった。その姿を見ながら、ちよつと失礼だったかもしれないと、私はひとりあせつた。お願いしているのはこちらなのだ。もっと上手な言い方を考えなければ。しかし彼女はべつに何を気にしたふうでもなく、しばらくするとまた口をひらいた。

「ねえ、お嬢さん。私は感じるんですけど、あなた、その方に何か言いたいこと、訊きたいことがあるんでしょう？ 亡くなった人に会いたいと言ってくる人はみんなそうですけど、でも、あなたの場合、ちよつと混乱していますね。何か、そう、非常に強い緊張があるようです。ある瀬戸際みたいところで、どっちに転ぶこともできずに、とても不安定な状態です。そういう状態で、こんなことに関わるのは、なんていうか、良くないと思いますよ」

「でも、会いたいです」

私は繰り返した。それしか言えないものまね鳥のように。彼女は辛抱強く諭すように私を見た。

「残念だけど、それは無理ね。まあ聞いてちょうだい。たとえ私だって、その方に会うことは非常に難しいんですよ。あれから一年以上上たってます。その方はもうバルドにいません。バルドにいるのは四十九日の間だけですからね。転生しているかどうか、それはわかりませんが、もし、転生しているなら会えませんし、その方の想念世界に入っていないらっしゃるとすれば、そんなの、私にも探し出せませんよ。バルドのテープには想念世界の出来事は、記録されませんからね。唯一、望みがあるとすれば、その方の想念世界に波長を合わせることです。そうすれば、そこに入り込むことができるかもしれません」

「やってみませんか？ お願いします」

私は必死だった。彼女はだが、あっさりと首を振った。

「駄目です。私はその方を知りません。この世において、出会ったことのない人です。縁がなかった人なんです。過去に何かよほど強い感情の交流がなければ、他人の想念に自分の波長を合わせるなんて、出来ない相談ですよ」

何か言おうとして、だがもう言葉が出てこなくなった。

ここまで来ても、やっぱり彼に拒否されたのだ。そんな気がした。会いたいののは、私だけ。忘れられないのは、私だけ。彼はもはや私の手など届かないところで、冷たく背を向けている。やっぱりそんなのよ……

私はバッグからあわててハンカチを出した。彼女は、じつと黙っている。窓ごしに、表通りをゆっくり歩いていく牛の鳴き声が聞こえた。そしてかすかに高く混じる女の鼻唄が。

「……すみません」

自分の膝に目を落としたまま、私は小さく謝った。そのとき、いくらか柔みを増した声で、彼女が言った。

「あなたが、やってみる？」

「え？」

私は彼女の大きな瞳をのぞきこんだ。少し躊躇するような様子で、彼女は続けた。

「ひとつ、安全な方法があるんだけど。その方には会えないけれど、もしかしたら、あなたの言葉だけは、伝わるかもしれないよ。それほど確実な方法ではありませんがね」

「何でもいいです、やります、私。やらせてください、先生！」

私は叫んだ。ほとんど反射的に。あとさきも考えずに。彼女はまたころころ笑った。細めた目尻に何本もしわを寄せて。笑いながら、顔の前でひらひら両手を振った。

「あらあら、いきなり先生ですか。やめてちょうだいな。私はパドマ。このへんでは、みんなパドおばさんと呼んでくれてるわ」

私は、見る人を懐かしいような気持ちにさせるその笑顔にすがりついた。

「はい。じゃ、私はパドマさんって呼ぶことにします。パドマさん、お願いします、私に、その方法を教えてください」

「わかりました。では、これからそれをお教えしましょう。なに、簡単ですよ、あなたほどの熱意があれば、手順はすぐ飲み込めますよ。私のほうでは、その方が転生されているのかどうか、調べておくことにします。これもたぶん、そう時間はかからないでしょう。比較的、最近のことですのでね。同時進行でやりましょう。だって、

あなたは旅人、時間は貴重ですものね」

「はい。よろしく願います」

「じゃ、できるだけわかりやすく説明します。これは、あなたにしかできないのよ。さつきも言っただけれど、その方と縁があったのはあなたで、私じゃありませんからね。まず理解してもらいたいのは、イメージする力、これが非常に大切だったことです。そして、集中力ね。ええと、たとえば、」

言いかけて、彼女はふと私を見つめた。小首をかしげると、にっこり微笑んだ。

「あらま、私ときたら。お嬢さん、まだあなたのお名前、聞いてなかったわ」

私は笑った。

「プルーティカ。プルーティカ・サリオです」

どこか大きなコンサートホールに立っているようだった。あちらからも、こちらからも、人の話し声がひそひそ、ざわざわと押し寄せてくる。男の声、女の声、若々しく軽やかな響き、重く澱んだ響き、さまざまな声はまるで交響曲のよう、折り重なり、引き立てあつてうねる潮となり、耳から脳へ流れ込み、ひたひたと満ちてくる。けれどもそれぞれが何を言っているのか、その言葉はわからない。ホールは暗く、一同は顔も定かには見えぬその薄闇のなか、ひたすらにささやき、喋りつづけているのだった。

そのざわめきが頂点に達しようとするころだ、どこからか鋭い悲鳴があがった。女の、甲高い、突然の恐怖に我を忘れたような悲鳴。そして、間をおかず一斉に、あたかも何か示し合わせたように、次々に悲鳴があがった。誰もが大声で叫び、叫びながら逃げまどっている。何が原因なのか誰にもわからない。恐怖だけがそこにあり、その場をとりしきっていた。動物じみた叫び声が、その恐怖をいやがうえにも増幅させていく。

ホールには逃げ場を求めてせわしく動きまわる人々の熱気が充満

している。しかし、誰もそこから出る扉を見つけれない。狭く閉じた空間で、ゴムボールがいつまでも無目的に跳ね返っているように、誰もそこから出て行くことはできない。そして、そのときになつて人々は気づく、ここにかつて入口があつたためしはなく、したがつて出口もまた存在しないのだと。

……雨が降っていた。

昨日の午後から降り始めた雨が、少し大粒になり、風と一緒になつて窓ガラスを叩いていた。

彼はベッドから抜け出し、冷たい汗で湿ったシャツを脱いだ。生温かい意識の底を爪でひつかかれるような、気持ちの悪い夢だつた。頭を振ると、彼は何事かを思い出し、半ば衝動的に櫛の扉まで走り寄つた。

何もなかった。

扉を開けると、雨が吹き込んでくる。扉の外には誰もいないし、床のうえにも何ひとつ目を引くものはない。濡れたポーチに雨粒がぴしゃぴしゃと跳ねているだけだ。

キッチンに入ると、テーブルのうえには四通の手紙。

彼は、ケトルを火にかけた。頭が重い。

顔を洗つてすっきりしようと、すぐ隣の洗面所に向かった。冷たい水をじゃあじゃあ流しながら、何度も顔を洗つて、掛けてあつたタオルでふいた。ふと、目の前の鏡をのぞきこんで、彼は、さあつと身体じゅうから血の気がひいていくのを感じた。

誰かがいる！

白い服を着た女が椅子に座っている！

鏡に映った部屋の端から、こちらをじつと見ているのだ。

声も出せず、彼は頬をひきつらせて振り向いた。

誰だ！

誰もいなかった。その椅子には、さっき彼が脱いだ白いシャツが無造作にひっかかっているだけだ。

ケトルがかたかた鳴つて、しゅんしゅんとお湯の沸く音が聞こえる。彼はにわかに、なにもかも馬鹿馬鹿しくなつてしまい、疲れた

足取りでキッチンまで戻った。

昼過ぎから雨は小降りになり、空も次第に明るくなっていくようになった。彼は、ぺらりと薄いゴムの雨合羽をひっかけて自転車に乗ったが、門番のコテージに着くころには雨もやんでいた。扉わきのベルを鳴らすと、門番が何かしら面倒臭そうに出てきた。

珍しく書棚の整理でもしていたのだろうか、部屋のなかには様々な本が乱雑に散らかっている。彼は床の本を踏まないように気をつけながら、窓際のロッキングチェアに腰を下ろした。その場所だけが、棚からあふれだした大量の書籍の侵略を、かろうじて免れていたのだった。

「いったいどうしたんですか。まさか虫干しじゃないでしょ、この湿気た日に」

「ああ、まったく。あんたも、せつかく来たんなら手伝ってくれないかね。ちよつと探し物をしてるのさ」

門番は大きな書棚のすぐ前に座りこんで、手当たり次第に本をばらばらめくっては放りだしている。

「いったい何を探してるんですか？」

「切り抜きだよ。市報からの」

「は？ 切り抜き？ 何の記事です？」

彼はそろそろと書棚に近づくと、まだ手つかずのまま残っている残りの本から一冊を手にとった。 稀少な山野草とその魅力、エ

ドナー・カウリン著。

門番は腰をあげ、彼を見上げた。

「五年前のミサーラ祭のときのだよ。あとき市報にのった写真の切り抜きさ」

「なんでまた、そんなものが？」

門番はチツと舌打ちした。

「祭りの最後の日、東西南北の門番がミサーラ寺院の法王の間で呼ばれたのさ。五年ごとに順繰りに交代する門番長の承認式があったんだ。その式のときとった写真が市報にのったんだよ。あのととき門番長になったのは、北のヤツだった。そしてこんどはこの俺さ。」

まだまだ先のことだと思つてたのに、えつ、気がついてみりゃあ、今年のミサーラ祭まで、もうあと二カ月しかないじゃないか」

「そういえば、そうですね」

「だろ？ だからあれがいるのさ。あんとき北のヤツがいったい何を着てたか、どんな格好で行つたのか、もうまったく忘れちまつてるんだ。思えば五年ごとの承認式で、一度も自分が主役になれない門番だつているんだ、運が悪けりゃ順番が回つてくるまで二十年ちかくかかるんだから。俺はラッキーなのさ。あと二ヶ月すりゃ、まがりなりにも主役になれる。その式に今までの誰よりも立派にしていきたい、これは人情だろ、えっ？」

「じゃ、その写真の切り抜きが、この本のどれかに挟まつてる、そういうことですか？」

門番は大きくうなずいた。

「まさに、そういうことだ。あの切り抜きを、しばらくはしおりの代わりにしてたのさ。で、どこへやつたかわからなくなつちまつた。たしか、ここらあたりの本だと思つたんだがな」

指さす先の三段目は、ほとんどからになつていた。

「細長い、これくらいの大きさの紙さ。あんたも手伝つてくれ。そつちはもう見た。こつちから調べてつてくれないか」

彼は首を振り振りつぶやいた。

「けど、何もこんなに散らかさなくたって」

「なに、どつちみち整理しようと思つてたところなんだ。あんたと二人でやれば片づけるのも早いさ」

彼が参加して十五分もたつただらうか、門番がすつ頓狂に声をあげた。

「あつたぞ！ これだ、これこれ。ほれ、見てみる、ここに俺がいる！」

彼は門番が手にした紙きれを横からのぞきこんだ。その白黒写真には、豪華な[^]法王の間^vの中央に似たような四人の男が並んでいる。左端がここにいる門番、隣で大きな巻物を手にしているのが恐らく北の門番だらう、誇らしげにそりかえって笑つていた。みな、式服を身につけている。けれどもやはり、ひときわ目立っているのがこ

のときの主役である北の門番だった。羽根飾りのついた長いマントまではおっている。結婚式の新郎もどきの格好だ。門番もそう感じたらしい、ふんと鼻を鳴らした。

「なんだこいつ、見栄はってやがったな」

おかしくなつて彼は笑った。

「こんな格好して行くんですか？　まるで、劇場で見る時代劇の王様みたいですよ」

「いいや。まあ見てなつて、俺には俺の流儀と美意識があるさ。あんたも二カ月後、楽しみにしてるんだな。それはそうと、いささか疲れちまったよ。片付けにかかるまえに、どうだい？　コーヒーでも？」

「そう言つてくれないかと思つてたんですよ」

門番は彼にその切り抜きを手渡すと、キッチンへ向かった。彼はまた窓際のロッキングチェアに腰を下ろし、なんとはなしにそれを見ていた。市報なんて、あまり気をつけて読んだことがない。

彼はその紙をくるりと裏返した。細かい字で印刷されていたのは何かの記事の一部分だった。時間のかかっていた寺院の事務棟の増築が、やっと終わったというようなことだ。記事の最後には実線で四角く囲まれた部分があった。

△これまで市役所で管理していたアカシヤ記録は、このたびの新事務棟完成にともない、以後はミサーラ寺院の管理するものとなります

彼は、その文章をもう一度、よく見直した。このアカシヤ記録つてのは、なんだ？

コーヒーのいい香りを漂わせて、門番が入ってきた。片手を伸ばし、マグカップを受け取ると、彼は訊ねた。

「あの、ちよつと訊きますけど、アカシヤ記録って何なんですか？　生地にとりどころ小さな穴のあいたソファに座り、テーブルの本を一方に片寄せながら門番が訊き返した。

「アカシヤ記録？　あんた、あれが見たいのか？」

「いえ、それは何のことなのかって、訊いてるんですよ」

「何だつて？ 知らないって？ あんた、市報をよく読んでないな」

「ええ、まあ。いったい何なんですか？」

門番は、熱そうにコーヒーを吹いて、一口すすった。

「あれは、過去世の記録だよ」

今度は彼が、すつ頓狂に叫んだ。

「過去世の記録、ですって？」

「あれ、あんたも無知だね。ミサーラ寺院じゃ、人が亡くなると毎度、ある特殊な占いかなにかで、その人がつぎに生まれてくる場所とか時間を割り出すんだ。門外不出の技術だがね、結果は確からしい。その一部が数年前の戸籍法改正で、一般にも公開されることになったのさ。もちろん占法じゃなく、その結果だがね」

「へええ、知らなかつたな。そんなことがあるんですか。じゃ、もう見てきたんですか？ 自分の前世を？」

門番は笑った。

「いや、見る気がしないね。見てどうなるってんだ？ そんなの覚えてもないことさ、知つたところで馬鹿らしいよ」

「そうですか？ でも気になりますよ」

門番は皮肉っぽく唇の端をあげた。

「あんた、やつぱりまだ若いんだ。俺くらいの歳になると、もう前世より来世のほうが近いんだよ。そつちのほうに気にかかるね」

彼は、世の中には不思議なこともあるものだと思い、ひとつ軽いためいきをつけてコーヒーの残りを飲んだ。しばらく黙っていた門番が、何か思いついたように彼を見た。

「そついえば、あれ、どうなった？ 今日も来たのか？」

「何ですか？」

横目で彼を見ながら、門番は言った。

「ブルーティカ嬢からの手紙さ」

「ああ、あれですか」

彼はマグカップから唇を離した。

「今日は来ませんでした。たぶん、間違いに気づいたんでしょう」
門番はふいと窓の外に目をやった。

「いや違う、たぶん、雨のせいさ。明日はきつとまた来るよ」
「なぜそんなことがわかるんです？」

また向き直ると、門番は意味ありげに笑った。
「だってそのほうが、面白いじゃないか」

あたかもそこにいるように。手を伸ばせば触れられる、話しかければ答えが返ってくる、そんな現実性をもって。ありありと、すべてを思い出してください。輪郭、色、質感、声音、匂い、すべてです。ちいさな部分まで、できるだけ完璧に。なかでも大切なのは、雰囲気の再現。どんな感じがしたか。明確な言葉をもたない、その感じ、生きていたそのときの肉体から周囲に発散していたもの、その方を包んでいた見えないベール、そういうものの再現です。

あなたの心のなかに、ほかの誰にも入ることのできない神聖な空間をつくるのです。あなたはそこに、血と肉と魂の模造品を創造するのです。アトリエで絵を描くように、工作室で粘土をこねるように、あなたの想像力でもって。

それは、思いのほか、つらい作業だった。

これまで考えるのを避けてきたこと、いい加減な憶測でごまかしてきたこと、忘れようと努めてきたこと、私はそれらを丹念に掘り起こし、泥をはらって、むきだしにしたまま、対峙しなければならなかった。その時間のなかで、心に浮かんでくることだけを文章にする。

あなたのほんとうの気持ちだけを書きなさい。パドマさんはそう言ったけれど、ほんとうの気持ちって何だろう？ 今いちばん言いたいことっていったい何？ そんなの、当たり前前にわかりきってるように、いざとなるとわからない。

渡された薄い紙は五枚。一日に一枚を書いて普通に折りたたみ、それを持っていく。彼女が受け取ると、なかも見ないで（想念のパワーが散る、と彼女は言うのだ）、死者への祈りを捧げながら、特別に処方した香と一緒に燃やす。それだけ、と言えばそれだけだ。

そのあと、彼女はミルク茶を出してくれる。私たちは何事もなか

ったかのように他愛もないお喋りをする、彼については話さない、注意深く、そのことにはいっさい触れないようにしている（他人の想念に汚されるといけない、と彼女は言う）。

セトが仕事をさぼって家にいることも多かった。私たちは三人でミルク茶を飲む。昼下がりの太陽が、斜めに差し込む小さな部屋で。セトはナム・ティンツのことなら何でも、喜んで聞きたがる。

町の様子はどうなってるの？ 学校は？ みんなはどんなふうに暮らしているの？

「あなた、いくつなの？」

彼が車でホテルまで送ってくれた時に訊いてみた。

「十四。でも、もうすぐ十五になるよ」

「学校は？」

パドマさんはあんなふうに収入があるんだもの、行けないはずはないわ。

「行かないよ」

「どうして？」

「つまらないから」

「どうしてつまらないの？」

「どうしても」

私は笑った。

「いろいろあるってことね」

「そうさ。いろいろあるんだ」

「あなたのおばあちゃんは、なんて言ってるの？ 学校へ行けとは言わないの？」

彼は唇をつんととがらせた。

「言うよ。ときどき。字もろくに書けないのは、よくないことだ。でも、嫌だよ。行きたくないんだ」

「ふうん。パドマさんとあなたって、あまり似てないわね。顔立ちもぜんぜん違うし」

「そりゃ、当然さ。血がつながってないもの」

私はびっくりしてしまった。

「そうなの」

彼の方は相変わらず無邪気そうだ。

「うん。おばあちゃんは結婚したことないんだ。僕がまだ赤ん坊のころ、村にすごい童巻が来て、それでほんとの家族はお父さんもお母さんもみんな死んじゃったんだよ。それで、あの家にもらわれることになったんだ」

「そう」

やっぱり、いろいろあるのだ。どこにでも。いつの時代でも。

空いた時間、私はあてもなく電車に乗って知らない駅　たいていは無人駅で、ちろちろとある人家のほかは果てしもなく草原が広がっているだけだ　で降り、そのあたりを散歩してみたり、狭い町のなかに細々とのびた商店町をぶらついては、木彫りの人形を買ってみたりした。そのあいだ、私はいつも彼と一緒にだった。姿こそないが、私は彼の面影を心にびったり貼りつかせたまま、どこへでも出かけた。

ホテルの部屋に戻ると、決まった時間にシャワーを浴び、それから机の前に座る。パドマさんに教わった手順を踏んで、イメージを完全に造り上げる。そして、広げてある白い薄紙を使って、手紙を書く。そう長いものは書けない。一日に、一枚限りだから。

パドマさんは言う。もし、その方がご自分の想念世界に入っているのであれば、あなたのことを忘れている、という可能性も高いです。すね。

あなたのことだけじゃありませんよ、これまでの人生そのもの、すべてを忘れて、新たに自分の世界を創造するんです。ですが、そこに実体はありません。すべては異次元のなかで、自分の想念が造り上げたものですから。そこはそういうところなんです。想念が世界を造るんです。実体はない、でも、それを造り上げている本人にすれば、あたかも実体があるように感じるんです。

この手紙、この方法が成功すれば、あなたの言葉を伝えることはできますよ、けれど、相手がそれを受け取って、あなたのことを認識できるか、かつてあった人生を回顧できるか、それはわからないんです。その方の想念世界がそれまで生きたこの現実とかけはなれ

ていれば、思い出せない、ということもありますね。あなたは、ですから、それを思い出させるように呼びかけなさい。あなたのごことが認識できれば、きつと何らかの形で返答が返ってきますよ。

それは、どんな方法かわからない、よくあるのは夢ですね。夢のなかに現れる。あとは普段ありえないような不思議なことが身のまわりに起こったり。恐れる必要ありませんよ。その方にどんな気持ちがあつたとしても、あなたに実害をなすことはありません。もうそんな力は持ち得ないのです。

一日目 何事も起こらず。

二日目 何事も起こらず。

三日目 何事も起こらず。

四日目。パドマさんのほうの結果がでた。

その日、少し遅れて行った私に、パドマさんはまたお茶を勧めながら言った。

「わかりましたよ。彼は、まだ転生してはいません。彼はまだバルドにいます。というより、自分の想念世界にいますでしょう。バルドを純然たるバルドとして認識できるのは、四十九日までですからね」「ほんとですか？ じゃ、もしも私のやっていることが成功していれば、彼は手紙を受け取っている、てことになりますね？」

彼女はうなずいた。

「全部が全部、受け取っているとは限りませんよ、そのときによってパワーも違ってくるでしょうし、あなたは素人です。ですが、可能性は見えてきましたね」

「……でも」

そのときだ、私の心に突如、ひとつの疑問がわき起こった。

「でも？」

「ねえパドマさん。私、思うんですけど、その想念世界って、すごくいいところなんですか？ だって、自分が世界を造るんなら、嫌なものなんて絶対造らないでしょう？」

彼女は軽く笑った。

「それは甘いですね、お嬢さん。あなた、自分の心に浮かんでくる

ものを、完璧にコントロールできますか？ 生きるなかで、人は、見たくないものも見てしまうでしょうし、嫌な経験をして忘れられないこともあるでしょう。知ってしまう、見てしまう、それは怖いことでもあるんですよ。精神的に未熟だと、それまで心に刷り込まれてきたものをコントロールできません。勝手に浮かんでくる良くない想念も、そこではそのまま実体に見えることになります。誰だつて、なんにも知らず、見ないままで生きるわけにはいきませんか。意識をコントロールしていくしかないんですよ。努力するなかで、自分の心に美しいものだけを浮かべられるとすれば、その人は天国を見るでしょう。でもね、そんなことはほとんどあり得ないんですよ。人間ですからね」

私は目を伏せた。

「そうですね。私ね、彼がそんなにいいところにいるんだつたら、私のために、またこの世界のことを思い出させるのは、いけないことかもしれないなつて、たつたいま、ふとそう思つたんです。でもほんとにすごく、会いたいんですけど」

パドマさんは静かに微笑んだ。そしてゆっくりと言った。

「そんなことはありませんよ。どのみち、人はそこに長くは留まれません。そこは、まだ完成に至る道の途中なんです。そのことを悟れば、また歩きださずにはられないものですよ」

パドマさんの言うことを、私は理解できるような、できないような気持ちで聞いていた。そのうち、セトが帰ってきた。またナム・ティンツで流行っている歌謡曲のことを喋っていたら、いよいよ日が暮れてきた。もうおいとましなければと立ち上がったが、パドマさんが私を見上げてさらりと言った。帰るの？ もう夕飯の時間だから、一緒に食べていけば？

「でも。そんなのご面倒かけちゃうし、帰ります」

彼女は面白そうに笑った。

「へこ面倒なんてかかりませんよ。家にあるもので食べるだけですからね。お客さま扱いはできませんけど、それじゃあ不服ですか？」

セトが横から口をだした。

「いいじゃない、食べていきなよ。帰りは僕が送るからさ」

両手をズボンのポケットに突っ込んで胸をそらせている彼の姿に、なんだかおかしくなって吹き出した。十四のくせに、いっばしのもの言いじゃないの。

「じゃ、お料理するの、私も手伝います。こう見えてもけっこう上手いんですよ」

セトは喜んで瞳を輝かせた。

「ねえねえ、ナムの料理ってどんなの？ 作ってよ」

「あら、でも。こっちはガネリがないでしょ？」

ガネリ、というのはナム・ティンツの近郊でよく採れるスパイスの一種だ。ナムではどこの家庭でも常備しているが、香りに少しクセがあるので、地方の人たちはあまり使いたがらない。

「セト、無理なこと言わないの。さ、始めましょ。と言っても狭いのよ、キッチン。まあ、あなたなら細身だし、入れるかもね」

セトはふくれている。私はパドマさんのあとからキッチンに入った。狭くて、簡素で、でもわりと清潔そうなキッチンだった。セトがつけたのか、居間のラジオから流れる音楽が聞こえてくる。この一帯でのローカル放送らしい。聞き覚えのあるその曲は、いつもセトが口笛で吹いている曲だ。 荒れ野の果てにきみは待つ

荒れ野の果てにきみは待つ

銀の三日月を黒髪にさし

憂いをたたえたまなざしで

それがいつかもわからない

それが誰かもわからない

誓いの言葉がただあるばかり

流れる時がただあるばかり

荒れ野の果てに待ちつつづけて

翌朝も、手紙は来なかった。

彼は、ほっとしたような、少し気が抜けたような思いで、遅い朝

食をとっていた。雨のあと、またわずかに強くなった日差しがポーチに降りそそぎ、開け放った窓から入るそよ風が、そこに置いてある白いゼラニウムの花びらを、ぱらぱら舞い上がらせている。

薔薇園では色とりどりの薔薇が、大人の手のひらほどもある大きな花を満開に咲かせていた。白薔薇は清楚な気品を漂わせ、赤薔薇は濃厚な香りを振りまいている。ジャムにするため、このところはばらくは農薬を使わずに育てていた。彼は、花びらに傷のないものを注意深く選びながら、明るい赤の薔薇をはさみで摘み取っていた。この色なら、ジャムにしたときルビー色がきれいにでる。かがり火という名のその薔薇は、愛好家の手によって交配された丈夫なばらである。赤と言ってもビロードのような深みのある赤でなく、ちょうど熟れた果実のような、みずみずしい赤だ。

腕いっぱい薔薇を抱えて昼前に園を後にし、蓮池のほとりを通りかかったとき、彼は今年はじめての蓮の花が咲いているのに気づいた。薄桃色の花弁が日の光を浴びて、泥池のなか、砂糖菓子のように細かな輝きを放っている。

彼はしばし足をとめ、その美しさに見入っていた。誰もいないその場所に立ち、染みひとつない夏の明るさのなかで、なぜか彼のなかにはふと、小さな不安が芽生えた。この穏やかな静けさ、このまばゆいばかりの光は、ほんとうに本物なのだろうか？

彼の腕のなか、薔薇が甘く香っている。ジャムを送る人々のリストをもう一度、思い浮かべた。お世話になったテリー夫妻、友人のオットー、近所のサラおばさん、西の門番……彼らの顔を思い浮かべながら、だが彼は、それらの人々がいま、どこでどうしているのかと問われれば、さあそれがわからない、確信がない、もしや彼らは紙細工の人形のように、いまごろはぺらぺらと地面にくずおれてしまっているのではないか？ 彼が訪ねて行ったそのときだけ、彼らはむっくりと起き上がり、やあ、久しぶり、元気かい、いい天気だね、などと喋り出すのではなからうか？

ぶつんと羽音をたてて、一匹の蜂が彼の耳元をかすめ去った。どうかしてる。こんな妙ちくりんな妄想にとらわれるなんて。

彼は再び歩き出した。甘い薔薇の香りにつつまれ、だがその香り

になぜか胸をしめつけられるような感じがする。空を見上げると、どこまでも透明に澄んだ青に、筆で描いたような雲が浮かんでいた。昼食を終えると、彼はコテージを出て自転車に乗り、町に向かった。身体を動かしていると、さつきまでの不可解な気分など夢のように霧散してしまふ。赤い薔薇は、水を入れた大きなバケツにそのまま突っ込んである。夕方には帰宅して、ジャムづくりにかかるつもりだった。

ミサーラ寺院の案内図を見たところ、事務棟は図書館とはまったく別方向にあった。れんが敷の小道を通ってそこまで行くと、まだ新しい近代的な建物が見えてきた。ほかの建物のように緑色のタイルが貼られていない。外壁は、そっけなく見えるほど装飾をはぶいた無機質な灰色だ。彼は所定の場所に自転車を止め、ガラスばりの自動ドアをなかへ入っていった。ドアは、するりと、音もたてずに彼の姿をのみこんで閉まった。

ロビーは無人で、案内係の事務員のかわりに、建物内のわかりやすい見取り図が壁に掲げられている。アカシヤ記録管理所、三階。彼は、そこにあるふたつの自動エレベーターの前に立って待った。まもなく一方のドアが開き、急いで乗り込もうとした彼は、中から出てきた黄色い僧服の老人とぶつかりそうになった。

「いや、これは失敬」

老僧は言い、すたすと出口へ向かった。彼はエレベーター内のボタンを確かめながら、失礼だったのは自分のほうなのに、と少し恥ずかしくなった。

三階の廊下にも案内板があった。矢印の通りに進んで行くと、これまた飾り気のないスチールのドアがいくつも並んでいる。奥から二番目のドアには「アカシヤ記録管理所」と書かれた真鍮のプレートが打ちつけてある。彼は、いささかの緊張を覚えながら、そのドアをノックした。

「どうぞ」

張りのある若い男の声が聞こえ、彼はドアを開けて中へ入った。つるつるした灰色の廊下同様、蛍光灯に照らされた部屋のなかも、

つるりとした灰色で、まるで学校の教室のように、二十ばかりの机と椅子がきちんと並べてあった。奥にもうひとつのドアがあったが、そこには関係者以外、入れないようだった。机の列から少し離れて、ひとつ大きなデスクがあり、そこに係の青年が座っている。この部屋が学校の教室だとすれば、その青年はあたかも担任の教師、という印象だ。ただ、普通と違うのは、青年も黄色い僧服を着ている。この事務棟は、どうやら僧たち自身によって直接、運営されているらしかった。

「なにか、ご用でしょうか」

部屋の光景に気を取られていた彼に、青年僧が声をかけた。

「あ、いやその。アカシャ記録……というのは、自由に見ることが出来るんですか？」

どこことなく気後れを感じながら、彼は訊いた。即座に、青年僧がこぎつぱりした笑みを浮かべた。

「この市に戸籍をお持ちの方なら、ご自分のものに限り、ご覧になります」

「じゃ、見せていただけますか」

デスクの上に積まれた書類の束から一枚を取って、彼に手渡すため、青年僧は立ち上がった。

「では、この申請用紙に必要な事項をご記入のうえ、サインしていただけますか。あ、筆記用具はお持ちですね？ はいはい、普通のペンでけっこうです。申請はすぐに受け付けられますので、あとはここで、三十分ほど簡単なテストを受けていただきます。それから回答用紙をコンピューターにかけて数値を出しますが、こちらの時間はほんの三分ほどで済みます。数値が適正な値であった場合、アカシャ記録の写しを発行いたしますが、適正な値でなければ、係の僧から面接を受けていただかなければなりません。その場合は、」

「ちよつと、ちよつと待つてください」

彼は、よどみなく湧き出てくる青年僧の言葉をさえぎった。

「アカシャ記録を見せてもらうのに、テストを受けるって、それはいったいどういふことなんですか？」

青年僧はまた愛想よく微笑みながら喋りだした。

「それはですね、こういった問題に対する精神的な耐性を調べるためです。以前、市報にも重要記事として載せましたが、戸籍法の改正によって、市民のみなさんご自分の過去世をある程度知ることができるようになったわけですよ。しかし、それによる弊害もやはりちらほら出てきたんですよ。まあ考えてみてください、たとえば一代さかのぼった過去世の自分が、非道な犯罪者であったり、豊かな貴族であったりしたとしてもですね、それは今世をつくる因果の因のひとつではあります。それだけが絶対的な影響力をもつものではないんですよ、そのところを私どもも強調しているわけですが、それでもそういつた理解がなく、過去にとらわれるあまり神経がおかしくなってしまう少数の人がいましたね。悲観したり憤慨したり、あげくの果てには過去世での事件や財産に対する訴訟を起こしたり。ここで教えられる過去世の事実は、ほんの一部にしか過ぎないんです。全部はともお教えできるものではありません。本来、すべての過去の因縁が現在をつくっているのですが、その一部にとらわれて、現在を見失う人もいますよ。これは、本末転倒ですよ。」

「はあ……」

じつと見つめられ、彼は何がなんだかよくわからないままうなずいた。

「そこでですね、私どもは半年まえから、申請されたすべての方を対象にテストを行い、精神に著しい不安定要素のある方には、過去世の写しを発行しないことにしたんです。とくに、現状逃避型の傾向があれば、寺院のほうで一定期間の修業をなさるよう、まずお勧めします。費用はかかりません。これは市と寺院の義務ですのでね。」

彼が黙っていると、青年僧はまた穏やかな笑みを浮かべた。

「ご理解いただけましたでしょうか。」

申請用紙に名前や住所などを書き込むと、ひととおり書き間違いないか見直し、最後の欄にサインをした。そして彼は、その部屋でひとり、テストを受けることになった。壁には大きな丸い時計がかかっている。試験用紙を手渡された彼が一番前の机に向かうと、青年僧は再びデスクに座り、説明を始めた。

いいですか、大切なことですので、正直に答えてくださいね。できるだけ「はい」と「いいえ」で答えていただきたいのですが、どうしてもわからないという場合のみ、「どちらともいえない」のマークを鉛筆で塗り潰してください。時間は三十分ですが、残りがわずかなようでしたら、終了時間になってもそのまま続けてくださってけっこうです。まあ、たいていの方は時間内に答えられますので、心配はいらないと思います。それでは、始めてください。

一 ページ目を開く。

設問一、

次の問いに、ご自分の現在の状態を考え、常にその通りだと思えば「はい」、まったくそうではないときは「いいえ」、時にそういうこともあるならば「どちらともいえない」を選び、回答欄のそのマークを塗り潰してください。

問一、昼間でも頭がぼんやりすることがある。

問二、理由もなく、気持ちが悪さを感じることがある。

問三、気分は爽快で、望みはほとんどかなうように思う。

問四、他人の評価が、気になって眠れない。

問五、真面目で嘘がきらいなので損をしていると思う。

問六、何かあると、悲観的な結果ばかりを予測してしまう。

問七、頭が重く、朝はなかなか起きられない。

問八、毎日の生活が楽しくて、まったく疲れを感じない。

問九、ささいなことから不安になって、動悸を感じる。

問十、集団の中では、リーダーシップを発揮するほうだ。

……このような問いが、そこにはえんえんと続いていったのだ。彼は、ひとつひとつ考えながら、丁寧に答案用紙のマークを塗りつぶしていった。ふと顔をあげると、青年僧は下を向いてなにか本を読んでいる。

あたりをもう一度見回して、彼はさっきから感じている居心地の悪さがどこからきているのか、ようやくわかったような気がした。

そのつるつるした灰色の部屋には、四方のどの壁にも、窓というものがなかったのだ。

パドマさんの家を出たのは、たぶん八時前くらいだったと思う。私は、セトのタクシーに乗り込むと、開いた窓からパドマさんに頭を下げた。彼女はにこにこして手を振っていた。セトは、いつものように口笛を吹きながら、車を発進させた。

ぱらぱらとある石造りの家々に、それぞれランプが灯っていた。郷愁を感じさせるほの黄色い光が、闇のなかに窓の四角いかたちをぼうつと浮かびあがらせていた。

黒い空には薄墨色の雲が流れ、その切れ目から大きな月がのぞいている。都会では見ることでないくつきりとした星々が、鮮やかな無数の光点となって天球にまたたいていた。

町への道のりをまだわずかに残し、さわさわと鳴る暗い草の海をわけて、車は走っていた。でこぼこ道の右手に、また明かりの集落が見えてくる。近づくにつれ、家々から少し離れて開けた場所に、赤い炎が上がっているのが見えた。

草を刈り取って作られた急ごしらえの広場に、人が三、四十人ほども集まり、まるでキャンプでもするように炎を取り囲んでいる。目を凝らしてみると、彼らは石を組んでつくったらしい小さな囲いのなかに、薪をどんどん放り込んで火を燃やしているのだった。すぐそばまで来ると、セトは車を止めた。

私は彼の横顔に訊ねた。

「あの人たち、何やってるの？」

セトは振り向いて私を見つめた。

「お葬式だよ」

セトは、いくらかためらいがちに、ちよつと降りていいかと訊いた。私はうなずいた。

私たちは車を後にし、青い匂いのする草を踏んで、その広場まで歩いていった。まもなく彼らの歌声が、高く、低く、聞き取れるよ

うになった。彼らは両手を胸のまえで合わせ、声をそろえて歌いながら、ときおり、薪や油などを炎のなかに投げ入れていたのだ。

燃え続ける石垣の囲いのなかには、どうやら人の遺体のようだった。ときどき何かはげせるパチパチという音が大きくなる。

「遺体を焼いてるのね」

私の声は、知らず知らずのうちに震えている。セトが小さく答えた。

「もうお坊さんは帰っちゃってるね。儀式は終わったんだ。あとは、灰にしてしまっただけだよ」

そのときだ、思いもよらぬことが起こり、私は我が目を疑った。

ひとりの男が大きな棒状のものを手にして、石組みの炉にのっそり歩み寄ったかと思うと、いきなりそれを振りかざし、遺体を乱暴に突き崩し始めたのだ。

その野蛮な、荒々しい行為に動揺して、私は思わず傍らに立つセトの腕を強くつかんだ。

「見て！　なんてことなの！　あの人、何してるの！」

私のささやきは悲鳴に近かった。セトはじっとしている。私の顔を見て言った。

「燃えやすくしてるんだ。ああして砕いてしまったほうが、早く灰になるから。いつもやってることだよ」

あえぐように、私は叫んだ。

「そんな、そんなこと。なんて恐ろしい！　人の遺体をあんなふうにあつて！」

セトは、黒い瞳を見開いたまま、きょとんとしていた。私がどうしてそう興奮しているのか、理解できないとでもいった調子で。どこか幼い子をあやすような口ぶりで話し始めた。

「だって、もう儀式が終わったあとなんだから、あの身体にはなんにも残ってないじゃないか。すりきれて着られなくなった服みたいなものさ。だけど、死んじゃった人の意識はまだ、どっかそこらさまよってるんだよ。ああやって、もとの身体をすっかり灰にしてしまうのは、あの人のためなんだ。自分が死んで、もう行かなくなっちゃいけないのに、身体がまだそのままそこにあつたら、未練が残

っちゃうからね。もう絶対にそのなかには戻れないのに、そのまわりでいつまでもさまよっちゃうんだ。それは死ぬよりもっとつらいことなんだって。そんなふうになっちゃうたら大変だから、残された人たちの手で遺体を焼くのさ。もう行きなさいって。行ってもいいんだよって」

言い終わると、彼は数歩進み出た。人々の輪の一番そとに立ち、同じように手を合わせると、死者を送るその歌に加わった。

誰も泣いたり取り乱したりする者はない。崩れ落ちる遺体を取り囲む、怖いほどに静かな人々の顔。見渡せば、弔いの場は、厳かな諦念に満ちているように思えた。

繰り返しの多い旋律が、ゆるやかな波となつて、耳元に打ち寄せてはまた引いていく。彼らは歌う、お行きなさいと。これ以上、無為に苦しむことなかれと。

燃える炎が彼らの顔を明るく照らしている。この光景には、不思議な自然さがあった。それはあたかも一枚の絵、シユールレアリズムの絵画のよう、時空や思考をあつさりときき抜け、当然、それがそうあらねばならぬ様子で存在していたのだ。

はぜる炎のはるか上空には黒い天蓋、そこにちりばめられたいくつもの星座が、完全なる永遠の象徴として、人々の頭上につめたく澄んだ輝きを放っている……

風に煽られ、炎の勢いが一段と強くなった。

身体の震えが徐々に止まると、私の内には、やがて無感動とさえ言えるような平坦さがやってきた。

私は、ただぼんやりとすべてを見つめていた。合掌もせず、人々の輪のずっと後ろで。自分がまったく別の空間からそれを見つめているような感じがした。この場所、この時に居合わせながら、私の意識はどこか遙かな異空間から、この地点を見下ろしているのだった。

私には、彼らと同じほど素朴で強固な信頼に、たどりつくことはできない。

私には、何もわからない。何も見えない。

私は、この思いのまわりをいつまでもさまよい続けている。

それはまさに死よりもつらいことなのかもしれない。だからこそ私は求め続けていた、この苦しみの輪を断ち切るもの、彼を完全に否定し去り、記憶の果てに葬り去ってしまえる証拠を。愛の残骸を跡形もなく打ち砕き、冷たい灰にしてしまえる、そんな証拠を。あの雨の夜、電話をかけてきたあと姿を消してしまった彼、彼を完全に無価値にしてしまうもの、その人間性までもを冷たい灰にしてしまえる証拠を、私は探し続けていたのだ。純粹に、私自身のためだけに。けれども、その望みは永久にかなわぬものとなった。あの日。彼の死によって。そして私の苦痛だけが、宙吊りのまま、ここに残されている……

いつのまにか、セトがすぐそばに立っていた。黙ったまま、私の顔をじつとのぞきこみながら。私は彼を見た。どうしたの、と訊くと、彼はどこか躊躇するように視線を外した。そして小声でつぶやいた。

「また、泣いているんじゃないかと思って」

私は微笑んだ。何か言おうとして唇を動かした。だが、何も言えなかった。ただ、腕を伸ばして彼を抱きしめたかった。けれども私はそうしなかった。歌はまだ、ゆるゆるとうねりながら続いている。横顔のセトの瞳は見開かれ、そこに赤い光が小さく映っている。

長い沈黙のあと、私は、ようやくのことで口をひらいた。

「行きましようか」

私を見つめたまま、彼はうなずいた。そして、また草を踏んで、私の前を車まで歩き出した。その背中を追いながら歩いていた私は、ふと何かに打たれ、とつぜん足を止めた。

なぜだろう？ 私は問いかける。

なぜ、それが不滅であってはいけないのか？

なぜ、それが永遠であることを、恐れなければならぬのか？

なぜ、その痛みを引き受けることができないのか？

私が立ち止まった気配に、セトは振り向いた。その瞳に宿る深みに、私はある普遍性を見た。幾重にも絡み合い、綿々とつらなっていく系譜、そのすべて、いつ、いかなるときにも単純にして清澄な普遍性、その明らかさを私は見つめた。そこに立ちすくみ、目を見

張って、まだ深く恐れながら。

闇のなかを死から成る炎に照らされ、個の独自性を軽々と凌駕する無限の輪が、そのとき私の目のまえで、ゆっくりと滑るようになり始めた。

試験は終わった。青年僧は彼の試験用紙と回答用紙を持ち、奥のドアを開けてその向こうに入っていた。かつきり三分後、青年僧はまたそこから出てきて言った。

「結果が出ました。あなたは合格です。アカシヤ記録の写しを発行できますよ」

彼は思わず椅子から立ち上がった。

「じゃ、お願いします」

「何代目が必要ですか？過去にむかって、一代目、二代目、という意味ですが。原則として、五代目まではさかのぼれることになっています」

あまり昔のことを知っても仕方がないと思った。

「それでは、一代目を」

かしこまりました、と青年僧は微笑み、再びドアの奥へと消えていった。それからまた二分ほどして戻ってくると、今度は小さな黄色い封筒を手に入っていた。彼はどことなく興奮しながらそれを受け取った。

「これが、こちらでお教えできるすべての事柄です。これ以上の詳しい記録は、一般にはお教えできません。特殊な事情がある場合のみ、法王の許可を得て、もう少し詳細な記録を閲覧できることになっていますが、めったなことでは許可は下りませんよ。よほど特殊な事情のある場合だけです」

青年僧が言い終わるのを待って、彼は封筒を開け、その中から三つ折にした紙を取り出した。どきどきしながらそれを広げたが、その記載事項にさっと目を通すなり、愕然とその場に立ちすくんでしまった。これは、なんとということだろう！

一分ほどのあいだ、彼は身動きひとつできなかつた。気分が悪かつた。冷汗が額ににじんでくる。係の青年僧が、心配そうにその様子を見守っていた。彼は、軽いめまいを覚えながら、顔をあげ、青年僧を見た。

「どうしました？ どこか具合でも悪いんですか？」

声をかけられると同時に、彼は思わず手の中の紙切れを乱暴に振りかざした。

「これ、これって、絶対に間違いないんですか？ 誰か他の人のものだってことは……」

「そんなことはまずあり得ません。ちゃんとコンピューターと専門技師によって管理されています。あなたの写しの内容は、正確なはずですよ」

彼は黙った。青年僧は哀れげに彼を見つめた。

「いいですか？ 自分の過去世を知って驚く人はたくさんいます。ですが、過去は過去なんですよ。もうすでに過ぎ去ったことなんです。それでも、それを受入れなくては、現在に生きる意味もわからなくなってしまう。まさにそういう趣旨において、この記録が公開されることになったんですよ。落ち着いてこういうことをよく考えてください。いいですね」

青年僧は彼の背に軽く手を当てた。だが、彼にはその言葉が半分も聞こえてはいない。

それからどうやってたどりついたのかはわからないが、気がつくとは彼は家の前にいた。帰り道の記憶がまったく欠落している。どうしても思い出せなかつた。けれども、そんなことはもはやどうでもいような気がしていた。ゆっくりとコテージの扉を開けて、彼はなかに入った。

ひんやり薄暗いキッチンのテーブルに腰をかけ、彼はポケットから封筒を出した。なかを広げて再びそのうえに目を落とした。

市民番号（〇二九四七三）番の方

これはあなたの過去世（一）代目の記録です

名前「レヴィ・スコール

性別〓男

誕生〓エイダ暦五三一年 五月二十一日 午後二時四十七分

主に暮らした場所〓ナム国 首都ナム・ティンツ

主に従事した職業〓調理師

記すべき身体的特徴〓特になし

刑罰〓なし

宗教〓なし

冒瀆、及び自己破壊行為〓なし

死亡〓エイダ暦五五七年 六月三十日 午後一時八分

原因及び場所〓航空機事故、ナム国トート族自治区ルーダ市

ながいこと、彼はそれを見つめていた。床のうえにはバケツに入った山盛りの赤い薔薇、その名の通り、かがり火のようにキツチンの片隅を照らしている。窓を閉めたままだったので、そこらじゅうに花の香りが薄く漂っていた。見えない煙か何かのように。

しばらくぼんやり座っていた彼の頭のなかで、いつしかまたあのざわめきが始まっていた。はじめはキーンという耳鳴り、そして、ひそひそ声からだんだんに大きくなる雑踏のざわめき。我慢していたが、もう耐えきれなくなると彼は両手で耳を押さえた。

神経にさわる無意味なざわめきが最高潮に達したとき、そのノイズをさつと切り裂くように、ひとつの笑い声が響いてきた。若い女の軽やかな笑い。と同時にあらゆる音が消えた。

彼は、思わず左右を振りかえった。さっきの笑い声は、どこかすぐそばで聞こえたような気がしたのだ。が、誰もいない。またテーブルのおもてを見つめたそのとき、耳元で声がした。彼のすぐそばで、誰かがその口を寄せて耳打ちでもしたように。とても、リアルに。

お花畑の香りですって？

彼は大きく目を見張った。弾かれたように立ち上がり、その瞬間ぐらりと身体が揺れた。とっさに彼はテーブルに手をつく、だが、

その手は、テーブルの固い感触をとらえられない。彼の腕は、白木の表面を何の感覚もなく突き抜けている。そのまま、彼はそこに倒れこんだ。身体ごとテーブルを突き抜け、床へと崩れ落ちた。ほぼ同時にタイルの床が音もなく崩壊し、粉々になってさつと四方に飛び散った。床が抜けたあとにはぽっかりと黒い穴があいている。何につかまることもできず、彼は落下した。彼のあとからはバケツの薔薇が、一本づつまるで鬼火のようにふわふわと暗闇に落ちていった。

彼は落ちていく、果てしなく落ちて、落ちて、やがて柔らかな衝撃があり、その落下は止まった。彼は、その身の数倍はあろうかと思われる巨大なシャボン玉のうえに、うつ伏せになっていた。ビールのような透き通った膜を通してなかを見ている。そこには羊水のなかに、まだ己自身のかたちさえ定まらぬピンク色の巨大な胚が浮かんでいた。

彼はあたりを見回した。自身を取り囲む暗闇のなかに、いくつものシャボン玉が、まるで宇宙空間の星々のように、はるか彼方まで点々と存在している。そのなかにはすべて、彼の姿があった。まだ赤ん坊の彼、よちよち歩きの彼、小学校の教室に座る彼、母親に叱られてうなだれている彼、父親に連れられて夕暮れの川辺を歩く彼、幼い日々、ありとあらゆる人生の瞬間が、その無数のシャボン玉に、精巧に再現され、閉じ込められている。胸が痛くなるほど懐かしい思いで、彼はそれらを眺めていた。

そのうちに彼は、あるひとつのシャボン玉に吸い寄せられる。

そこでは雨が降っていた。夜だ。町灯の暗い光の下、彼は公衆電話のボックスにいる。もはや成人した彼だ。彼は何か話している。短い話、ふたこと、みこと、それが終わると受話器を置く、そして足元から大きなバッグを持ち上げようとする。だが、またすぐ手を放してしまう、まるで、持ちたくないものを持たされているみたいに。しばらく、彼はじつと何かを考えている。一台の白い車がそばを通り過ぎる。が、彼は目もくれない。それから唐突に彼は泣き出した、ボックスの壁にもたれ、その場にしゃがみこんで。

彼は、泣いていた。薄い透明な膜、そのなかにも、そとにも、泣

いている彼がいた。彼らは完全に同調していた。彼らは、泣いて、泣きながら叫ぶ、

プルーティカ！

その刹那、ぱちんと音をたててシャボン玉の膜が割れた。

彼はまたしても落ちていく、雨が彼を打ち、濡れながら彼は落下する、ものすごいスピードで。そして、いやというほど地面にたたきつけられる。骨ごとばらばらになってしまいそうな衝撃。あとは闇。真つ暗な闇。

……頬に冷たい感触がして、彼は身を起こした。テーブルの傍ら、キッチンノタイルの床に、彼は横たわっていたのだった。そのまま、しばらく床にうずくまっていたが、やがて彼は子供のようにすすり泣き始めた。

パドマさんの家につくまで、私は考え続けていた。光にそよぐ緑の草原を眺めていると、なにかもが夢の中であつたことのように感じられる。けれども、ゆうべ見た広場にさしかかると、そこにはまだ黒こげの石組があつたし、人が集まって何かしていた。骨を拾っているのだろうか。

私に乗せた車は、ゆさゆさと揺れながら、その脇を通り過ぎていく。いつになく寡黙な運転手は、今日の私には似合いの相棒だ。

セトの車はなかった。私はなぜかほつとした。パドマさんがすぐに出てきて、私たちはいつものように部屋に入ると、向き合つて座つた。私は紙を出した。何も書かれず、折り目もついていない、まっさらの白紙。

パドマさんはじつと私を見つめた。私は言った。

「もう、終わりにします。今日は、書いてきませんでした」

彼女は微笑んだ。説明を、求めるような求めないような、曖昧な瞳で。私は重ねて言った。

「もういいんです、彼のこと。もう終わりにします」

「気がすんだのね？」

パドマさんは言った。私はうなずいた。

「はい。私、明日の朝、ここを発ちます。ナム・ティンツに帰ります」

視線を少し落として、パドマさんは小首をかしげた。

「そう。セトが聞いたら寂しがるでしょうね。あの子、あなたのことずいぶん気に入ってるんですもの」

「今まで、どうもありがとうございます」

「どういたしまして。あなたのお役に立てたかどうか。え？ あら、いけないわ、こんなの。あなたのような若いお嬢さんから、お金をなんて受け取れませんよ」

「でも。ほんの気持ちですから」

彼女は封筒を押し戻した。いえいえ、駄目ですよ。そんなことしないで。私も楽しかったんですもの。

「楽しいなんて言うては、きつと不謹慎なんでしょうね、でも、あなたみたいな若い人とお喋りするの、やっぱり楽しいんですよ。刺激があつてね」

彼女はまた目を細めてころころ笑った。

「だから、受け取れませんよ」

そのかわり、と彼女は私を見た。あなたの心境の変化について、ちよつと聞かせてもらえない？

「もちろん、言いたくないなら、かまいませんよ。無理は言いませんから」

私は微笑んだ。

「いいえ。無理じゃありません」

言葉を選ぼうとして、私は少し考えこんだ。でも、今の気持ちを誰かにうまく言い表す言葉なんて、とうてい浮かんではこない。あきらめて口を開いた。

「……彼のこと、私のなかで星みたいなものになったんです。絶対にもう手が届かないけど、見上げたならそこにいつもある、そんなふうに。いろいろ確かめたいことはあつたけど、でも、彼に訊かなく

ても、誰に言ってもらわなくても、私自身が答えを知ってるってことに気づいたんです。それは、うまく言えませんが、もうわかっていること、だのに今まで否定しようとしてきたこと、そういうことなんです。だけど私、もう疑いません。証拠もないし証明もできないけど、自分を信じようと思います。それで、もう充分じゃないかって。……前にこんな話を聞いたことがあるんですけど、ええと、たとえば夜空の月は、そこにあるから存在するのか、それとも、それがあると思っただけでいるから存在するのかって。ほんとのことってわからないけど、私は、あると思っただけで思っただけで、ないと思えばないのかもしれない。でも、私自身のどこか深いところで、それはあると信じてるんです。そう信じたいんです。それで、もういいんじゃないかって。……すみません、なんか、わかりにくいですよね」

パドマさんはしばらく黙っていた。やがて、ゆったりとした口調で言った。

「いいえ。わかります。いえ、わかるような気はしますよ」

「ほんとですか？」

彼女のやわらかな眼差しが、何か考えるように遠くなった。

「ええ。心の夜に星の輝きを持つている人は、あまりいないものです。あなたは幸運ですね。たとえ昼の時間がどれほど鮮やかな輝きに満たされていても、いったん日が落ちてしまえば、人は長い夜を過ごさねばならなくなります。たいていはひとりきりでね。でもそこに星があれば、もう暗闇を恐れずにすむでしょう。ブルーティカ、私はあなたを祝福しますよ」

「パドマさん」

彼女は、私の瞳をまっすぐにのぞきこむと、力のこもった声で言った。

「あなたは、これまで幸せでした。今も幸せですし、これからも決して不幸にはなれないでしょう。これが、私の祝福の言葉です」

パドマさんの穏やかな笑顔を、私は見つめていた。胸に熱いものが満ちてきて、何を思うひまもなく、心地よい涙が流れた。パドマさんがそばにきて、そっと私の肩に手を置いた。彼女が触れた肩先

から、その手のひらのぬくもりがかすかに伝わってくる。やさしく懐かしい温かさに、私は自分をあずけていた。そうしているのが、とても気持ちよかった。

彼女の家を出て、私は再びサイワナ慰霊碑へ行こうと思っていた。あそこに何かあるというわけではないけれど、気持ちの区切りとして行くには適当だ。

このあたりの人は、墓地もつくらないのだと聞いた。どこかにずっと留めおくべきものなど、ここでは何も無いようだ。慰霊碑は、当局の意向を受けて特別に制作されたものだった。

パドマさんは、家の前まで私を見送ってくれた。
「元気でね」

私は何も言えずに、ただ頭を下げた。

一瞬の沈黙のあと、彼女はどこかためらうような表情で続けた。

「こんなこと言っても、あなたの慰めになるかどうか。でも……あなたの方は、あまり長生きはできなかったかも知れませんよ。たとえばの事故にあわなかったとしても」

私は彼女を見つめた。

「どういうことでしょうか？」

「あの方は、ある特殊な病気にかかる可能性が非常に高い人でした。恐らく、それは遺伝的なものだと思います。はつきりとはわかりませんが」

話しているパドマさんの瞳に、かすかな揺らぎがあった。私はそれを見逃さなかった。

病気ですって？ まさか。彼は知っていたの？

私は思った、パドマさんには、なにかもわかっていいるのではないか？ 何がどこでどうなって、そしてこれからどう続いていくのか。

私は目の前に立っている銀髪の老婦人をじっと見つめた。もう彼女の唇は閉ざされ、また素朴で親しみのある笑顔が戻っている。口を開きかけて、だが私は訊くのをやめた。彼女は恐らく答えないだろう。彼女がそう判断するなら、きっとそのほうがいいのだと思っ

た。

旅立ちに、何の荷物もいらないとわかっていた。

彼は朝日に輝く草の香りを踏みしめて歩いた。

蓮池には薄桃色の花が、またひとつ、ふたつ、増えている。それを見つめていると、急に視野がせばまり、あたりの風景がぼけるようにかすんできた。彼はぎゅっと目をつむり、またそっと開いた。風景はもとに戻り、さわやかな風が肌のうえを吹き抜ける。

コテージに着くと、門番が彼を出迎えるなり言った。

「行くのかね？」

彼がうなずくと、門番は深いためいきをつきながら彼を手招きした。居間のソファに座るよう言い、自分は奥の部屋に引っ込むと、何かぺらっとした一枚の書類を手にして戻ってきた。

「ここんここにサインするだけだ。簡単なことさ。けど、なあ、考え直さないか？ あんたが行っちまうと寂しいよ。なんだって、こんなことになっちまっただんだ」

彼は黙っていた。

「本当に行くんだな？」

門番は彼を横目で見た。

「やれやれ。わざわざ苦労しに行くなんて、もの好きだね、あんたも。変わりもんだよ、まったく。な、やめとけよ。こここのほうがいいって」

静かに、しかしきつぱりと、彼は言った。

「行かなきゃならないんです。わかってるんですよ」

門番はしばらく彼を見つめていた。視線を落としてつぶやいた。

「……そうか。そうだよな」

彼は、その書類にサインした。門番の指した箇所以外、もう何が書かれてあるのか、読めなくなっていた。文字の列が見えていても、それが何を意味するのか、まるでわからない。習ったことのない外国語のようだった。それから彼は立ち上がり、西の鉄門まで、門番

がじゃらじゃらと鍵を鳴らしながら歩くあとをついていった。錆かけた黒っぽい門をよく見れば、もう何年も使われたことがないような感じだった。立ち止まった門番が振り返って言った。

「いいか、くれぐれも気をつけるよ。わらぶき小屋や木のうるには入っちゃ駄目だ。暗いところから低い歌声が聞こえたら、耳をふさいでそこを通り過ぎろ。どろんとした目をしてうろろ歩き回ってる奴もいるが、そんなのかまっちゃいけない。嵐や火事の幻覚や幻聴に悩まされたら、そんなものにはすべて、実体がないんだと念じるんだ。きれいな寺院が青い家が見えてきたら、とりあえずそこへ向かって進め。だがな、白い光を見つけるようにしろ。白い光だ。いつもそのことを念頭に置いて、忘れるんじゃないぞ。わかったな」

「はい」

門番は彼の格好をじろじろ眺め回した。

「この町のもものは一切、持って出ちゃいけない。なにも持ち出していないだろうな？ 余計なものを持っていると、自分が苦しむだけだぞ」

「何も持ってません」

門番は大きな鍵を回して門を開いた。ぎいっと耳障りな音がした。向こうに広がっているのは、前に見た光景だ。門から濃い緑の森までは、崖になっている。のぞきこむと、岩は切り立ち、足場となるものは極端に少なかった。それを見て急に怖くなり、彼は思わず振り返って門番を見た。

「だいじょうぶさ。これがある」

いつのまに持ってきたのか、門番は彼に細いロープを差し出してみせた。

「これを門の外の柱にくくりつける。あんたはこれを使って下まで降りるんだ」

彼は、そのたよりないロープをたぐりよせた。仕方ない。ないよりははずっとましだ。

「言うておくが、崖の途中まで降りたら、上を見ちゃいけない。もう、この城壁を見上げちゃならないんだ。わかったな？」

何か気のきいたせりふを残してこの町と別れたかったが、彼には、

もはやどんな言葉も出てはこなかった。

ロープをしつかり掴むと、彼はそろりそろりと崖を降り始めた。頭上で、ぎいっと、また門がきしんで閉まった。その音に彼は胸が痛んだ。が、同時に門番の言葉を思い出して、かろうじて振り向かずにすんだ。しかし、懸命に半分ほど下ったところで、彼は小さな足場に立ち、額の汗を拭いて、どれくらい降りたのだろうかと思ひ、ふいと何気なくうえを見上げてしまったのだ。そして、驚きのあまり、その岩から転げ落ちそうになった。

そこにあるはずの城壁が、きれいになくなっていた。

崖が途中からもやもやと途切れ、向こうの青空が見えている。細いロープは空中から忽然と姿を現し、彼の手元までぶら下がっているのだ。

なおも彼が見ていると、あつというまにそのロープも、崖も、青空も、すべてがぼんやりしてかすみ始めた。半透明になりながら、しまいにはすっかり消えてしまい、足場を失った彼はそこから落下した。眼下に広がる湿った原生林の緑に向かつて。

まつさかさまに落ちながら、彼の目はまるで鳥のように、森の木の葉のいちまいいちまいまで、くつきりととらえている。長い夢から醒めるように、ある本能的な意識が彼のなかで急速によみがえってきた。それは、彼自身をわきに押しやってしまうほど、ますます鮮やかに研ぎ澄まされていく。彼は観念して、それに同調し、やがて自身の場を明け渡すと、そのなかに自ら呑み込まれてしまった。激しい混乱とさまざまな感情が、いっぺんに戻ってくる。

彼は落下し続け、ついにばさばさと木々を突き破り、地面にたたきつけられる。そして、ばらばらになってしまふ。しばらくすると、ばらばらの手足から彼自身が煙のようにゆらゆらとたちのぼり、またひとつに融合して彼をかたちづくった。

自身の手も足も放置したままで、彼は歩きだした。それらに目もくれず、すべてを置き去りにして、彼は森の奥へと歩いていった。

ホテルの表、回転ドアのすぐ前の階段に、セトは座っていたのだ。私が気付かずにスーツケースを持って出ると、彼がさっと立ち上がった。

「プルーティカ！」

振り向いた私は少し驚き、だがとてもうれしかった。

「セト！ どうしたの？」

「帰るんだろ？ 待ってたんだ。早起きして」

「こんなところで？ フロントの人に訊いて、ロビーで座ってればよかったのに」

「だって……」

彼は口の中で何かもごもごつぶやいた。たぶん、そこまで頭が回らなかったのだろう。セトにしてみれば、こんなホテルなんて、まったくの別世界なのだ。

駅まで送っていくよと言い、彼はスーツケースを持ってくれた。

私たちはその短い道のりを、何も喋らずに歩いた。駅の入場切符を、私は彼に買って渡した。私たちはひとつしかない改札を通ると、小さなホームのまんなかにある簡易ベンチに並んで座った。

まだあまり人影もなく、駅員が大きなあくびをしながら、私たちのまえを通り過ぎていった。時計を見ると、列車が来るまで、あと五、六分ある。

私はポケットからフルーツキャンディを取り出して、彼の手のひらに乗せた。彼はぼそりと礼を言うと、両手の指先でキャンディをくるくる回しながら、パイナップルの絵柄が印刷された包装紙を眺めている。いつまでもそうしているので、私は可笑しくなって訊いた。

「どうしたの？ 食べないの？ ひよっとして、嫌いななの？」

彼は答えた。まだそれをじっと眺めたままで。

「ううん。好きだよ。でも、後で食べる」

言うと、彼は自分のシャツの胸ポケットに、それをしまいこんだ。こんな場面は苦手で、何を言えばいいのか、わからなかった。セトも同じだったんだと思う。また彼は、口笛を吹き始めた。列車のやって来る方角を一心に見つめながら。

やがて、すすけたオレンジ色の列車が、草原の向こうから小さく見えてきた。

セトは口笛をやめた。

「来たよ」

私は微笑んだ。

「うん」

セトが、何か思い切った様子でこちらを向いた。

「僕、明日から学校へ行くよ。ちゃんと勉強して、いつかナム・テインツの大学に行くんだ」

私は少し目を見張って彼を見つめた。彼は真面目に続ける。

「おばあちゃんも、それはいいことだつて。頑張れば出来るつて」

「そう。私もそれは素敵な考えだと思う。頑張つてね」

セトが落ちつきなく立ち上がりながら、早口で言った。

「うまく字が書けるようになったら、一番に手紙出すよ」

がたんがたと派手な音を響かせ、列車がホームに入ってきた。

私は立つて、ドアが開くのを待ち、ホームに面した窓際の座席に荷物を置いて座った。セトは開いた窓の鉄枠に手をかけて私を見つめている。私は窓に向かって片手を差し出した。彼は、意味がわからないかのように、ぼうつと私の手を見つめていた。私は、まだ窓枠に置かれている彼の手を無理に握った。

「ありがとう。短いあいだだったけど、会えてよかったわ。あなたにも、あなたのおばあちゃんにも。ほんとに、すごく感謝してる」

私の声は、駅員が吹く甲高い笛の音に半分かき消されてしまった。列車がまた、がたんがたと動き出す。セトが、それにつられたように私の手を強く握りしめた。

「また会えるよね。僕が大学へ行ったら。またそのとき会える？」

私は何度もうなずいた。きつとだよ、とセトは叫び、つないだ手が離れ、走る列車の窓から彼が急速に遠ざかる、そして、私たちはホームの端と列車の窓に別れて、いつまでも手を振っていた、互いの姿がだんだんに小さく、ついには見えなくなってしまつまで。

吹き込んでくる風に髪をなびかせながら、私はきらきらと波うつ

草原を眺めた。地平線にかすんで見えるのは、なだらかな低い山脈。ぼつぼつと生えた灌木の根元にうづくまる動物の黒い影。

ナム・ティンツに帰ったらすぐ、パドマさんに何かお礼を送ろうと私は考えていた。何がいいかしら。ゆったりした薄手のカーディガンはどうかしらね。彼女には赤がよく似合う。あの見事な銀髪には。セトには音楽のテープを送ってあげよう。

私は微笑んだ。あの子、ちゃんと勉強して進学できるのかしら。できるかもしれない。できないかもしれない。どちらでもいいことだ。その頃にはもう、彼のほうで私のことなど忘れているだろうから。それでいいと思うし、寂しさに胸痛む気もした。

その頃には。私は考える。その頃には？

その頃には、私はどうしているのかしら？

私はまた、無限の輪が回っているのを見つめる。私は、どうしているのかしら？

私はひとりで暮らしているかもしれない。

誰かと結婚しているかもしれない。

子供を産んで、育てているかもしれない。

わからない。さきことは、誰にもわからないことだ。私は彼のことをまた思う。彼の魂があるのなら、いまどこでどうしているかと。だが、もうその答えなど知らなくていい。

どこにいてもいい。

なにをしてもいい。

ただ彼が、幸せであってくればそれでよかった。たとえ彼が私のことを忘れていても、私はきつと彼を忘れないだろう。私にはわかっていて、私たちがかつていた時間には、真実の断片があったと。それは消え去ることのないもの、その価値は、決して減ずることのないもの、それはまさに[^]永遠_vに付随する苦痛と歓喜なのだ。そして、そうであればこそ、それはなにものに損なわれることなく、あらゆる風化、どんな破壊からも免れながら、それ自身としての輝きを時の深みに織り込んで残るのだということも。

私はまた誰かに出会うだろう。

私はまた、誰かを愛するだろう。

その人に微笑み、愛していると言うだろう。

嘘でなく、心から、そう言うだろう。それもわかっている。そのときが来るのが、もう見えている。

私は生きている。そして、生きている限り、私は彼の幸福を祈り続けるだろう。どこか深く、静かな、意識にさえ上らない夜の闇のなかで。

トート空港から、私は家に電話をかけた。めずらしく弟がでた。

今日が日曜であつたことを、私は思い出した。

もしもし？ いまから飛行機に乗るから、そっちには五時ごろ着くと思う。弟は、空港まで迎えに行つてやるよと言ひ、私はお願いするわと頼んだ。荷物が重いわけじゃないけど、弟とくだらないお喋りをしながら帰るのも悪くない。

私は受話器を置くと、またスーツケースを転がしてエスカレーターに乗った。長いエスカレーターのなかほどこで、誰かに呼ばれたよくな気がして、ふと振り返った。混雑したロビーでは、裾の長い民族衣装を着た人々が、せわしなくあちこち移動して歩いている。そこに知った顔があるはずもない。

ふいに私は、遠くまで来てたんだなと思つた。

パドマさんも、けさ別れたばかりのセトも、もうすでにどこか遠く、少しずつ少しずつ、その現実味をなくしかけているように感じられる……

ぼんやりしている私を押しつけて、誰かがエスカレーターを駆け上がっていった。私は押された腕をさすりながら時計を見た。時間は充分ある。そんなに急ぐこともない。

二階の通路からは、窓のガラスごしに広い滑走路が見えた。私が乗る便はもうあるかしら。

昼の日差しを浴びて銀色に輝く機体が、そこにはいくつも並んでいる。そのうちのひとつが小刻みに揺れ、やがて滑走路を南に向けて動き出した。私はそれを目で追つた。ある地点で機体はぐるりと方向転換すると、機首を西に向けた。一瞬、力を蓄えるようにすべでの動きを止める。そして、そこから徐々に勢いを増して走り出す

と、轟音とともにその助走の頂点で地面を離れ、ふわりと宙に浮き上がった。あたかも自らの意志を持つもののように、その生命の全力をこの瞬間に燃焼させながら。

私は窓に近づいて、その光景を眺めていた。すぐ後ろを足早に人が通り過ぎていく。私はそこに立っていた。きらきら光る機体の銀色が白い尾を引き、青空を流れる雲のあいだにどンドン消えていくのを、ながいこと私は見守っていた。

了